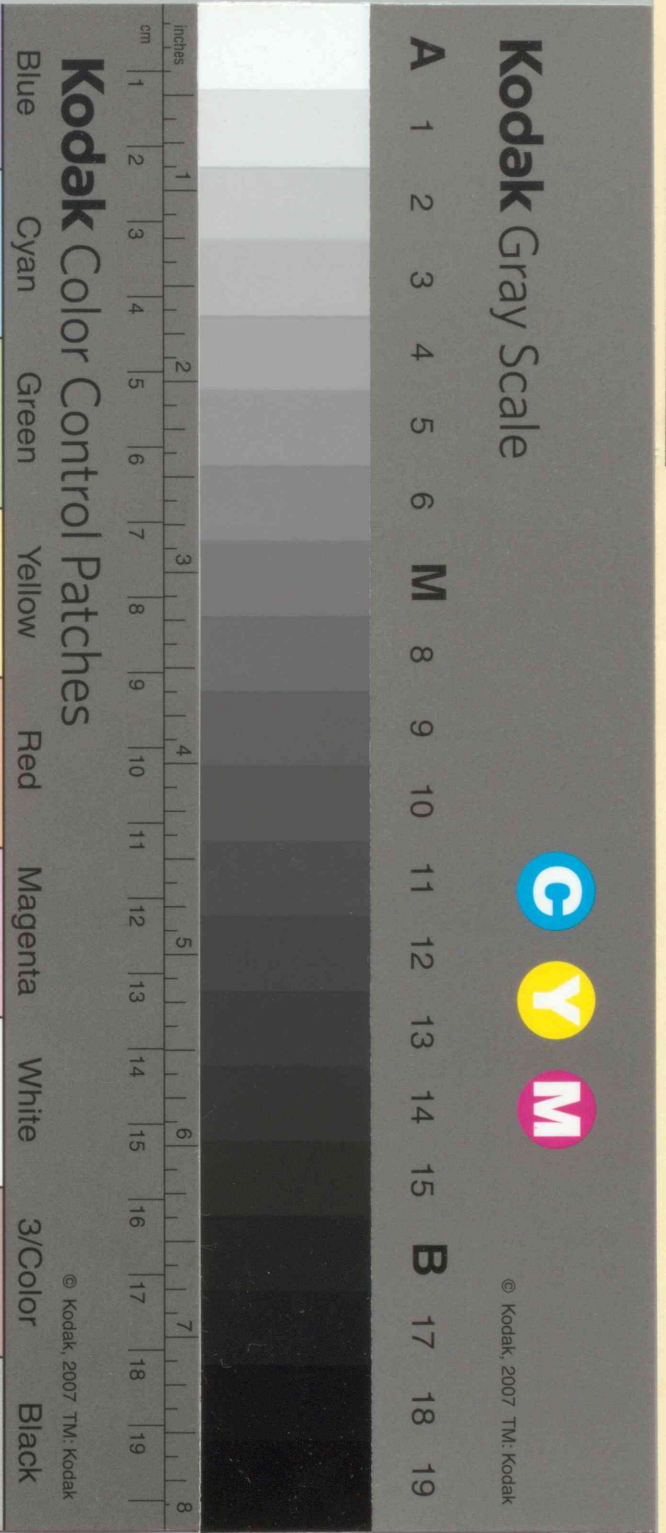
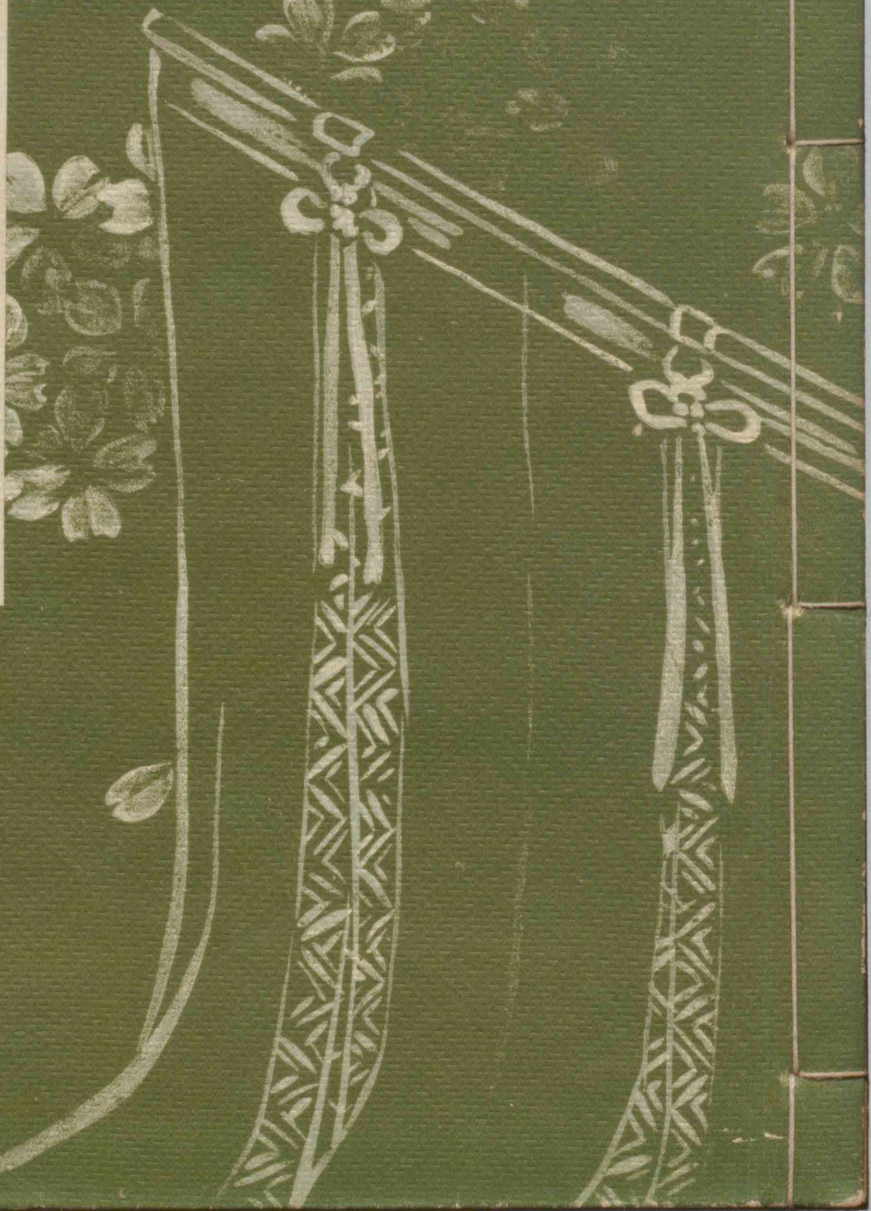


女子新讀本 卷二

3759
Hi19
資料室



42224
教科書文庫
4
810
42-1926
200030
1725



3759
Hi19

文部省檢定濟

大正十五年十月二十一日 高等女學校國語科教科書

東京帝國大學教授文學士久松潜一編



女子新讀本



東京 至文堂



女子新讀本 卷三

目次

一	禮節作法	芳賀矢一
二	四月の言葉	北原白秋
三	春日野	大類伸
四	蛙	芥川龍之介
五	山の歡喜	河井醉茗
六	カナリヤ(一)	高濱虚子
七	カナリヤ(二)	高濱虚子

目次

一

八 五月の巴里……………島崎藤村…三〇

九 興津の里……………高山樗牛…三九

一〇 清淨の國……………大町桂月…四四

一一 乃木夫人……………遅塚麗水…四九

一二 詩人の妻……………下田歌子…五五

一三 九十九里濱(一)……………徳富健次郎…六三

一四 九十九里濱(二)……………徳富健次郎…六六

一五 無線電信の偉効……………伊藤賢治…七一

一六 三人の時計……………長與善郎…七五

一七 千里の藪……………伊東忠太の文に據る…八二

一八 峠の茶屋……………夏目漱石…八七

一九 懷古……………島崎藤村…九七

二〇 森の畫……………吉村冬彦…一〇一

二一 鬼作左……………(藩翰譜)…一〇八

二二 無識の得……………薄田泣菫…一三三

二三 立秋の丘より……………北原白秋…一三七

二四 秋日記……………沼波瓊音…一三三

二五 筑波詣で(一)……………大和田建樹…一三六

二六 筑波詣で(二)……………大和田建樹…一三〇

二七 襟飾……………薄田泣菫…一三七

二八 農夫の生活……………島崎藤村…一四〇

二九 银杏樹(一)……………水野葉舟…一四五

三〇	银杏樹(二).....	水野葉舟...二五〇
三一	秋の夜.....	西條八十...二五五
三二	月の戦場ヶ原.....	田山花袋...二六一
三三	勿來關.....	熊田葦城...二七一
三四	鼠.....	吉村冬彦...二七五

目次終



女子新讀本 卷三

文學士 久松潜 一編

一 禮節作法

日本人は禮儀正しい國民である。知人は往來て遇つても丁寧(ていねい)に頭を下(か)げ、腰(こし)を屈(ま)めて、二度も三度もお時儀(ときぎ)をする。かゝる事は外國(がいこく)では見(み)られぬことであるから、自國(こく)の風俗(ふうぞく)に較(くら)べて、西洋(せいやう)人は珍(めづ)しく思(おも)ひ、我が國民(こくたう)の禮節作法(れいせつさくぽう)に敦(とん)いのに感心(かんしん)するのである。又(また)日本人(にほんじん)が始めて(はじめて)西洋(せいやう)の社會(しゃかい)に

入れば、その應對・挨拶の簡易なのに驚くのである。

日本人現今の禮節は、もとより久しい間の封建時代に、甚だしく繁縟になつたものに相違ない。當時社會が上下種種の階級に分れて、自分の仕へる主君の上に主君があり、其の上にもまた主君があるといふ有様であつたから、主君に頭を下げる度よりは、今一層低く主君の主君に向つては下げねばならず、主君の主君が頭を下げる主君の主君の主君には土下坐もしなければならぬといふ風に、多くのむづかしい禮儀の階級・尊卑の階級が生じた。又上からは自分の尊嚴を保つために、段々と下の方に向つて禮節を嚴重に守らせたのである。此の如く封建時代階級の制度が、七重の

膝を八重にも折るといふ禮節を作つてゐるには相違ないが、併しながら其の本源に遡れば、遠い昔の神を尊ぶ民族の風から出たのである。古代の國語を見るに、已に多くの敬語・尊稱が含まれてゐる。神名の上に天神・稜威(嚴)・齋(忌)・湯御・廣・大・磐瓊・日・彌等の語のあるのは、皆その事業・性行などに就いて讚美の意を表した詞である。ヒコ・ヒメは日子・日女である。ミコトは御事である。又御子(皇子)・御家(宮)などの如きは、すべて御といふ敬稱辭を附加したものである。オ(御)はオホの略で、オホは大多等の語基で、これも敬稱辭である。此の如き敬語が後世になるに随つて、神・皇室・皇族から大臣・公卿にも用ひられ、次第に廣がつて一般人の間にも用ひら

れるやうになつて、今日のやうに敬語の多い日本語となつたのである。

支那民族も、我が民族と同じく祖先崇拜の民族である。祖先の祭祀を大切にする民族である。社稷といふ語が國家の意味になつたのは、此の爲である。孔子の教には、禮・樂・射・御・書・數といつて、禮を第一に數へてある。此の教が我が國に入つた事も、慥に我が國民の禮節を重んずるやうになつた一原因に相違ないが、これを待つて始めて我が國民が禮節を知つたと思ふのも、亦大なる誤想である。我が國民は上代からマツリゴトを以て國を建てた國民であるから、上代から禮儀作法に於て慎んだことはいふまでもない。

カミを祭り、カミに對する時ほど、心の正しい時はない。チガムといふ語はチログムの略で、敬虔の意を表す身體の折れ屈む意の語から出たものである。禮の古語はキヤである。キヤキヤシク(恭しく)神を祭る時の態度がキヤである。即ちこのキヤを以て身を修め、それに則とつて平生の坐作・進退をなす事は、人の最も立派な行跡で、一室に獨坐する時でも、その心掛、その態度で居らねばならぬといふ考が、國民の禮儀を發達させた重大な原因である。儒教はこの點に於ても、よく我が國民性に合したものであるから、一層この風を盛んならしめた。彼の勢望ある人の權威・命令はただこの風習を利用して、一層その段階を作つたに過ぎぬ

ものである。西洋に於ても、亦種々の禮儀作法がある。交際上の習慣はなかくむづかしいものである。これは昔の騎士道から發達して、婦人を重んずる事が主になつてゐる。文明國である以上、日常の交際に禮節を重んずるは當然であるが、元來が平等主義の歐米諸國と、元來がカミ崇拜の我が國との間には、自然に差別があるのである。階級制度の廢棄と西洋文物の輸入との爲に、今日の我が國の禮儀作法は大いに亂れてゐる。殊に男女青年の社會に於て、禮節の觀念の薄らいで行くことは大いに戒心を要する。古來特に禮節を重んじて來た國民が、思ひ切つて一切の舊慣を棄て舊禮

を忘れる程の大變革を斷行したればこそ、幕末の困難を排除して、明治維新の大業を成就したのであるが、それは非常の際に於ける自然の勢で、又已むを得ざる所でもあつた。併し其の後、我が國運は大いに進んで、世界強國の中に卓立して、三千年來傳へ來た特殊な國民性の光を世界に輝かすに至つた今日に於ては、國民は國體・國民性に大關係を有して發達して來た禮節作法を、決して蔑ろにしてはならぬ。

(芳賀矢二)

*文學博士
國文學者
東京帝國大學名譽
教授
國學院大學長

二 四月の言葉

ここに移り住んでから、これほどに、わたしは、しみじみと

した、しかもまた明るい春らしい春に遭つたことはない。ただ僅かに五六日しか他行しなかつたのに、歸つて見ると小田原の町はもう櫻の眞盛りになつてゐた。ことにお濠端の並木などは、あの大地震に崩れ盡くした石垣の上から殆ど根こぎになつて、満開してゐた。ある枝などは、青濁りの水にその尖端がとどいたなりで、既に薄紅く匂ひこぼれてゐた。或ものはまた舊城の枯松や霜焼けした鉾杉などと、横倒しに食ひ違つたまままで、而も恐ろしく咲き白んでゐた。

それよりもこの天神山を登つて、いよいよ私は春の闌けたのに驚かされた。傳肇寺といふ名ばかりのこのバラッ

クの寺の墓地前の櫻も、遅咲きの八重ながら、もう疾くに盛りになつて井戸の側の崩れた竹垣の上には、紅紫の蘇枋の花が咲き出し、うちの木兎の家との界にはまた、造花のやうに眞紅の桃の花が光り輝いて、下垣の青い落の葉までも、却つて色濃く引き立たせてゐた。私は家のはいり口の二本の棕櫚の根方に、紅い一輪のアネモネの花をも見つけた。而も、それよりもまだ私の目を驚かしたのは、家のまはりの孟宗林の楚楚たる姿の薄黄色であつた、いや、その下萌えの深い緑の色であつた、雨にぬれた薺の花のむらがりの白色であつた。

いや、まだ驚いたのは、吾が子の顔であつた、姿であつた、急

に目立つて賢しく大きく見られたことであつた。

庭の花壇にはいろいろの草の芽生が見えて來た。金蓮花・羯鼓菊・向日葵・雛罌粟・ムンフラワー、蒔けるだけ蒔いた野菜の二葉それからひとり生えのコスモスや葉鶏頭などは、もう足の踏み場さへもないほど生えつめて來た。

窓の下の山吹にも、ちらちらと枝の深い方で黄色く綻ぶる花も見えた。南天の實もいよいよ紅く濕つて見えた。

つい前の隣の小藪には、實に新鮮なたんぽぽが數かぎりもなく、朝毎に咲いては、また寺の子たちに摘まれてしまつた。この裏の別荘の丘に登ると、そこらはもう土筆の季節が過ぎて、代りに一面の杉葉が露を綴り、虎杖の柔かな嫩芽、

幼い御形蓮、見るもの踏むもの毎に、私は更に水水しく親しい隣の春を楽しまずにはゐられなかつた。

つい、二三日前の夜には、ころころと、蛙の遠音も聞えたやうであつた。

私たちは、鍬を取つて、あちらこちらの孟宗の根を掘り反しては、まだ先の黄色い幼い筍を探しまはつた。

出入りの魚屋が、今朝鮭の卵を持つて來た。私たちは、それを煮、取りたての鱒の刺身をつくらせては、新筍の五目飯に満腹した。

かうしてまた、赤い鳥の兒童の詩の選をしたり、童謠を作つたり、紅茶を飲んだり、ココアを沸かしたり、蕎麥かきを頼

*
兒童雜誌の名

*名は隆吉
詩人
文士

ばつたり、じゃがたら漬をたべたり、ヂアスタアゼを嚙んだ
りしてゐるのである。
(北原白秋)

三 春日野

奈良の附近は到る處古蹟が多くあります。古い寺の屋
根が森の間に見え隠れする、五重の塔が歴史を語りがほに
霞んで見える、畑の間に礎だけ残つて居て、その石の割れめ
に寂しく董などが咲いて居る、何れも昔を思出す種となら
ないものはありません。然し、あの優しい若草山の麓、そこ
は春日野と呼ばれてゐますが、その野ほど色々の語草に富
んだ處はありません。かはい無数の鹿、春日神社の使



奈良春日野

はしめとして奈良の人は今でも
大切にして居るが、昔は、若しも其
の鹿に危害を加へると、その人は
生きながら地中に石埋めにされ
たと言ふほど大切にされた鹿は、
群をなして春日野に遊んでゐま
す。又、今はすっかり俗化しまし
たが奈良名所の猿澤池も春日野
の一部と見られます。その池は
昔、奈良の御門の御時に、年若い采女がおのが身の上をはか
なんて入水したといふので、有名になつてゐます。

猿澤の池から少し東、かはい鹿の澤山遊んでゐる緑の野原の間に雪消の澤と呼ばれる小さい池があります。

古歌に

春來れば雪消の澤に袖垂れて、

まだうら若き若葉をぞ摘む。

とありますが、奈良朝の昔、あの優美な衣を着けたうら若い少女たちが、おのが身の上にも似たうら若い若葉を摘んだのは、何れ此の池の畔であつたでせう。今は紫の色ゆかしげな藤の花が長い房を水に垂れてゐて、四邊には只新しい時代の人々が翳す紅や白のバラソルが目立つて見えるばかりです。

併し千年も昔の春日野には、嘗に少女の遊ぶ姿ばかりではなく、もつと嚴めしい光景をも其處に認められたのです。その頃春日野には「とぶひ」と言つて、烽火を高く揚げる處がありました。是は戦争などの如き、國家に一大事の起つた場合に、高く火を揚げて急を知らせる爲で、春日野を一に飛火野といつたのも、その事實からでした。そしてその烽火の番兵の嚴めしい姿も、此の野道を徘徊したのです。さればこそ、古歌にも

春日野の飛火の野守出てて見よ、

いま幾日ありて若菜摘みてむ。

などと詠まれてあります。

(天類伸)

*歴史家
文學博士
東北帝國大學教授

四 蛙

自分の今寝ころんで居る側に、古い池があつて、其處に蛙が澤山ある。

池のまはりには、一面に蘆や蒲が茂つてゐる。其の蘆や蒲の向うには、丈の高い白楊の並木が、品よく風に戦いてゐる。その又向うには、静かな夏の空が見えて、そこには何時も、細かい硝子のかげのやうな物が光つてゐる。さうして、其等が皆實際より遙に美しく池の水に映つてゐる。

蛙は其の池の中で、永い一日を飽きず、ころろかららと鳴きくらしてゐる。ちよいと聞くと、それが唯ころろかららとしか聞えないが、實は盛んに議論を闘はしてゐるのである。蛙が口をきくのは、何もイソツツの時代とばかり限つてゐる譯ではない。

中でも蓮の葉の上にある蛙は、大學教授のやうな態度でこんな事を言つた。

「水は何の爲に在るのか。我々蛙の泳ぐ爲にあるのである。蟲は何の爲に居るか。我々蛙の食ふ爲にあるのである。」

「ヒヤア、ヒヤア」と池の中の蛙が聲をかけた。空と草木との映つた池の水面が、殆ど埋れる位な蛙だから、賛成の聲も勿論大したものである。丁度この時、白楊の根元に眠つて

ゐた蛇は、此のやかましい、ころろ、かららの聲で眼をさました。さうして、鎌首を擡げながら、池の方へ眼をやつて、まだ眠さうに舌舐めずりをした。

「土は何の爲にあるか。草木を生ける爲にあるのである。では、草木は何の爲にあるのか。我々蛙に蔭を與へる爲にあるのである。従つて、全大地は我々蛙の爲にあるのではないか。」

「ヒヤア、ヒヤア。」

蛇は二度目の賛成の聲を聞くと、急に體を鞭のやうにびんとさせた。それから、そろ／＼蘆の中へ這ひ込みながら、黒い眼を輝かせて、注意深く池の中の様子を窺つた。

蘆の葉の上の蛙は、依然として大きな口をあけながら辯じてゐる。

「空は何の爲にあるか。太陽を懸ける爲にあるのである。太陽は何の爲にあるか。我々蛙の背中を乾かす爲にあるのである。従つて、全大空は我々蛙の爲にあるのではないか。既に水も、草木も、蟲も、土も、空も、太陽も、皆我々蛙の爲にある。森羅萬象が悉く我々の爲にあるといふ事實は、最早何等の疑を容れる餘地がない。自分はこの事實を諸君の前に闡明すると共に、併せて全宇宙を我々の爲に創造した神に、心からなる感謝を捧げたいと思ふ。神の御名は讃むべきかなである。」

蛙は空を仰いで、眼玉を一つぐるりとまはして、それから又大きな口を開けて言つた。

「神の御名は讃むべきかな……」

さういふ語がまだ了らない中に、蛇の頭がぶつかるやうに伸びたかと思ふと、此の雄辯なる蛙は、見る間に其の口に啣へられた。

「からら、大變だ。」

「ころろ、大變だ。」

「大變だ、からら、ころろ。」

池中の蛙が驚いてわめいてゐる中に、蛇は蛙を啣へたまま、蘆の中へかくれてしまつた。後の騒ぎは、恐らく此の池

の開闢以來、未だ曾てなかつた事であらう。自分には、其の
中で年の若い蛙が泣聲を出しながらかう言つてゐるのが
聞えた。

「水も、草木も、蟲も、土も、空も、太陽も、みんな我々蛙の爲にあ
る。では蛇はどうしたのだ。蛇も我々の爲にあるのか。」

「さうだ。蛇も我々蛙の爲にある。蛇が食はなかつたら、
蛙はふえるに相違ない。ふえれば、池が——世界が必ず
狭くなる。だから蛇が我々蛙を食ひに来るのである。

食はれた蛙は、多數の幸福の爲に捧げられた犠牲だと思
ふがいい。さうだ、蛇も我々蛙の爲にある。世界にあり
とあらゆるものは、悉く蛙の爲にあるのだ、神の御名は讃

*文學士
文士

むべきかな。

これが、自分が聞いた年寄りらしい蛙の答である。

*芥川龍之介

五 山の歡喜

あらゆる山がよるこんである、

あらゆる山が語つてゐる。

あらゆる山が足ふみして

舞ふ、踊る。

あちら向く山と、

こちら向く山と、

合つたり

離れたり、

出てくる山と、

かくれる山と、

低くなつたり

高くなつたり、

家族のやうに親しい山と、

他人のやうに疎い山と、

遠くなり

近くなり、

あらゆる山が

山の日に歡喜し、
山の愛にうなづき、
今や

山のかがやきは、
空一ぱいにひろがつてゐる。

(河井醉茗)

*
名は又平
詩人

六 カナリヤ (一)

或春の夕暮のことであつた。鎌倉の西御門の高松寺に滞在中であつた友人が、私の家を訪問してくれた。其の時友人が「坊つちやん、好いものをあげませう。」と言つて差出したものは、一つの菓子袋にはいつたものであつた。私も妻も大勢の子供も皆一齊に其

の菓子袋に眼を集めた。菓子がはいつてゐるものとしては如何にも輕さうで、然も其の膨れ具合が變で、友人はその口をしかと握つてゐた。やがてそれが一羽のカナリヤであるとかわかつた時、蠅除けの丸い金網を盆の上に乗せたのが持出されて、其のカナリヤは窮屈さうに其の中に入れられた。電氣の光で見るカナリヤは殆ど黄色味の無い、ただ純白な鳥に見えた。人を怖れて飛ばうとしても、金網の穹窿が上からかぶさりかゝつてゐるので、翼を延ばすことも出来ず脚をかがめた儘で小さい眼を異様に輝かしてゐた。友人は斯う話した。

「西御門の家を出て少し來ると、道端に小さい鳥が十分に飛ぶことも出来ないでゐるのが見えた。近寄つて見ると、此のカナリヤであつた。私は容易くそれを掴まへることが出来た。何處

かの籠を脱出したものであらうが、此の儘ほうつて置いては却つて殺される怖があるので可愛さうに思つたから袂に入れて、八幡前まで来て、或店で菓子袋を貰つて、それに入れて來たのです。此の異様な贈物は、一方ならず、私の家の者を喜ばせた。中でも最も驚喜したのは今年十一になる次男であつた。早速一つの鳥籠が近所から借りられて、カナリヤは其の中に移された。前の金網よりは稍自由になつたので、却つてカナリヤは人を怖れて、其の中で騒いだ。早速稗の鉢も其の中に入れられて、柱の高い釘に掛けられた。次男は柱の下に立つて暫くそれを見守つてゐた。

翌朝次男の起きたのはいつもより早かつた。彼は其のカナリヤに行水させることと、其の翼を掃除することを、自分から自分の役目と考へたものらしかつた。私等のまだ寝てゐるうちに、彼は

床を離れてカナリヤの籠を持つて湯殿にはいつた。暫くの間そこで時間を費した。それから彼は顔を洗つて飯を食つて、時間に遅れぬやうに學校に行つた。

カナリヤは人馴れてよく啼いた。午前は大方の子供が學校へ行くので、靜かに一人縫物をしてゐる姉娘の頭上で、カナリヤは何の屈托もなく、朗らかに歌を歌つてゐた。午後になつてどや／＼と多くの子供が學校から歸つて來ると、大方皆其の籠の下に立つてこれを見上げた。中にも次男は自分の力に生育さすべき、此の小さい愛すべきものを熱心に眺めた。さうして翌朝又何時もの通り早く起出でて、長い時間を湯殿に費した。

湯殿の流しの隅に小さい青いものが煙の如く生えてゐるのを、或日私は湯に入りながら見つけて、不思議なことと思つた。優曇

華が咲くといふが、これも其の類であらうかと思つた。が、近づいてよく吟味した時、それは稗の芽であることを明らかにした。次男が毎朝鳥籠を掃除する時に、そこにこぼれた稗が板の隅にありながら、濕氣を得て芽を出したものであると氣がつくと、何となく微笑された。元來土に生えたものでなく、板間の上に流れた湯の濕氣と暖氣を得て、煙のやうに發芽した其の稗は翌日見ると、もう湯に流されてしまつて、跡を留めなかつたが、二三日して又別の稗が同じやうに、夢の如き青いものを出してゐた。併し、それが流されてあとかたもなくなつてしまふことも、亦元の通りであつた。

「何時まで續くであらう」と家人が皆次男の骨折を危んでゐたが、併し彼の早起は少しも變らなかつた。カナリヤは何時も好い羽色をして、輕快に歌ひ囀つてゐるのを、私は毎朝軒下に見出した。

「二羽では可愛さうだから、今一羽買ひ足して、籠も本當のカナリヤ籠にしてやらう。」などといふ動議が今は大人から出るやうになつた。今迄の籠はカナリヤ籠でなく、普通の鳥籠であつた。お友達は容易に買はれなかつたが、本當のカナリヤ籠は間もなく或人の周旋で、立派過ぎるほど大きなのが近所から借りられた。一番喜んだのは次男であつた。カナリヤは早速彼の手に依つて其の籠に移された。

新しいカナリヤ籠は玄關の下駄箱の上に置かれた。カナリヤは新しい廣い天地に、自由に飛び且歌つてゐた。次男の手が籠の中にはいるのを見ても、小鳥は最早驚いて羽搏くやうなことはなかつた。

七 カナリヤ (二)

それから數日經つての事であつた。或日私は机に凭れてゐると、もう學校から歸つてゐた次男と妹娘の聲が玄關の所に斷續して聞えてゐたが、やがて妹娘の聲で「カナリヤが逃げた、逃げた」といふのが聞えた。それは極めて暢氣な緩やかな調子であつたので、私は餘り氣には留めなかつた。家人等もそれを氣に留めるものがなかつた。それに次男は靜まり返つてゐて、何とも言はないので、全く妹娘が戯談半分にからかつてゐるものと、一同が受取つたのであつた。暫くしてから、又同じやうな落着いた緩やかな調子で妹娘は繰返して言つた。

「カナリヤが逃げた、逃げた。」

暫くしてから、

「本當に逃げたのですか、お坊つちやん」といふ貞さんの聲が聞えた。

「まあ本當に逃げたの」といふ妹娘の聲も聞えた。けれども次男の聲は依然として少しも聞えなかつた。さうして、

「え、本當に逃げたのよ」といふ妹娘の落着いた聲が聞えた。私は机の上の仕事を休めて、暫く聞き耳を立ててゐたが、多くのものの斷續して發する聲のみ聞えて、カナリヤは段々と下の枝から上の枝へ、近い木から遠い木へと枝移りして行つて、呼んでも騒いでも、もう捕へることの出來ぬ所へ行つてしまつたらしく想像された。「カナリヤが逃げた、逃げた」といふ妹娘の悠長な聲はまだ時々繰返されてゐたが、次男の聲は少しも聞えなかつた。「お坊つちや

ん、あなたどうしてお逃しなすつたの。などといふ貞さんの詰問の聲も聞えたが、それに答へる次男の聲は闕として聞えなかつた。私は再び机の上の仕事に取掛つたが、暫くして家人から斯ういふことを聞いた。「あのカナリヤはたうとうお隣の庭に飛んで行つてしまつたので、御用聞きに來た八百屋の小僧や、牛肉屋の小僧までが大騒ぎをして、今までの籠を持つて行つたり、網を持つて行つたり、竿を持つて行つたりして騒いだけれども、段々木深く逃げて行つてしまつて、もう捕へることは出來ぬ」といふ話であつた。家人が皆落膽したやうな顔をしてゐた。併しそこに次男の姿は見えなかつた。

その日暮方であつた。

「どうもあのカナリヤは裏の木で啼いてゐるやうだ」といふやう

な話を貞さんがした時、家族のもの頭には又彼のカナリヤの事が一様に浮かんた。其の時妻は私に斯ういつた。

「どうしてあのカナリヤが逃げたのかと思つたら、次男はカナリヤをどうかしてやる積りで、前の小さい籠の方に移さうと思つて、大きな籠の戸を一杯に明けたものと見えるのです。それで何故そんな不注意なことをしたのかと思つて聞いて見たら、もうあれ程自分に馴れてゐるものだから、カナリヤは逃げないものと思つてゐたらしいのです。」

さう言つて妻は笑つた。私も笑つた。

その後私の會つた時、次男は眼に涙を溜めてゐたが、カナリヤに就いては一言も發しなかつた。彼に對しての忘恩のカナリヤは、やはり我が家と隣の家との間の裏の木立に啼いてゐるらしいと

貞さん等は言ひ合つてゐたが、彼はそれに就いても何とも言はなかつた。その裏の木立のカナリヤらしい聲も、翌朝は聞えなくなつてゐた。カナリヤの籠はそれぞれ近所の家へ返された。

(高濱虚子)

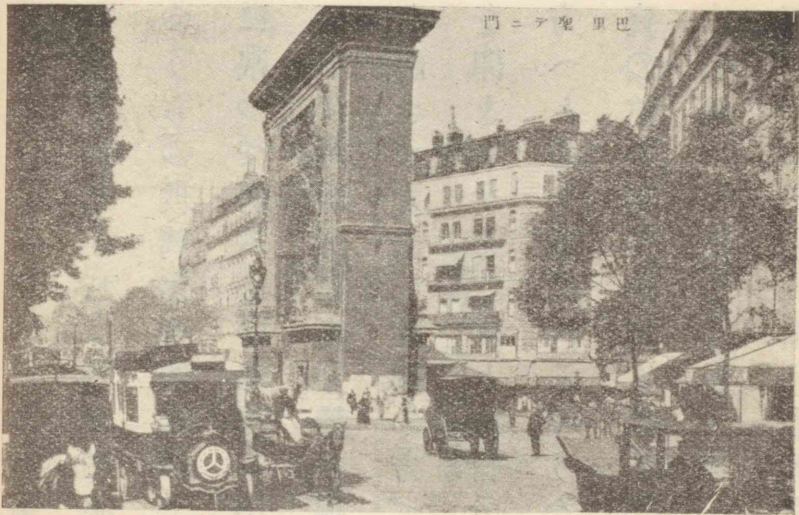
八 五月の巴里

山羊の乳を賣りに来る男が朝早く斯の町を通ります。幾頭かの山羊を引連れながら面白をかしく笛を吹いて来るのでして、呼留めて買はうとするものがあれば直其の家の前で新鮮な乳を絞つてくれるのです。今朝も私は山羊の乳賣の笛に眼を覺ましました。夢のやうに寢床の中で

耳を澄ますと、遠い牧場の方からでも若草を吹く五月の風がとぎれとぎれに持つて来るやうな其の笛の音がまだ朝のうちの玻璃窓へ傳はつて来て、何か斯う自分等の心の底に眠つて居るものを誘ひ出されるやうな心地が致します。死んだ傳説が復自分等の胸に活きかへるかのやうな心地を起させます。故郷の方であの飴屋の吹いて来る唐人笛を聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へと心を誘はれるやうな氣が致しますが、斯の山羊の乳賣の笛の調子が何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し清んだ柔かな音です。巴里のやうな大きな都會の空氣の中にも斯うした牧歌的な情調を傳へる細い幽かな*

*Melody
諧調

*街路樹の一種



巴里聖德門

ロデイが流れて居るかと思ひました。只今は當地でも最も楽しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわただしく散つて若葉に變つて行くやうな趣は當地には見られません。でも春の過ぎて行くといふ心地が私の胸に深く浮かんでまゐります。日に日に茂つて行くプラタア

ンの並木の若葉がすこし萎れて見える時、その葉の間に日光の満ちた時、五月らしい雨が来て柔かな新緑の活きかへる時、私はまた遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだと同じやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます、それが微風に吹かれて絶えず形を變へるのを望みます。長い黄昏時が復やつて來るやうになりました。恐らく斯の黄昏時は、暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつともつと長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の日と丁度反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明るくしてしまふでせう。月の光の弱い事は斯の通信で一度申上げました。ほんとに當地へ參つては何時月が出たかと思

*佛國の畫家

ふやうです。シヤヴンヌの筆に成つたパンテオンの壁畫にある聖ゼネギエウの晩年の圖——何時見ても深い靜寂な感じに打たれるのは彼の壁畫です——あの慈悲深い年老いた尼さんの對して居る月も、當地へ參つて見て點頭かるるほどの淡さにシヤヴンヌ特有の色調で描いてございます。季節こそ違ひますが「深夜坐南軒、明月照吾膝」とは全く東洋のことかと存じます。昨日の夕方、五月のことではありますし、實に淡い月が斯の窓の外にかかりました。地帯から言つて當地が北海道あたりに近いことは鈴蘭の花で思ひ當ります。あの花が信濃の山の上でも採集されるのは、やはり北海道あたりと氣候を同じくするからで

* (佛語)
象徴記號
* 名は春樹
詩人
小説家

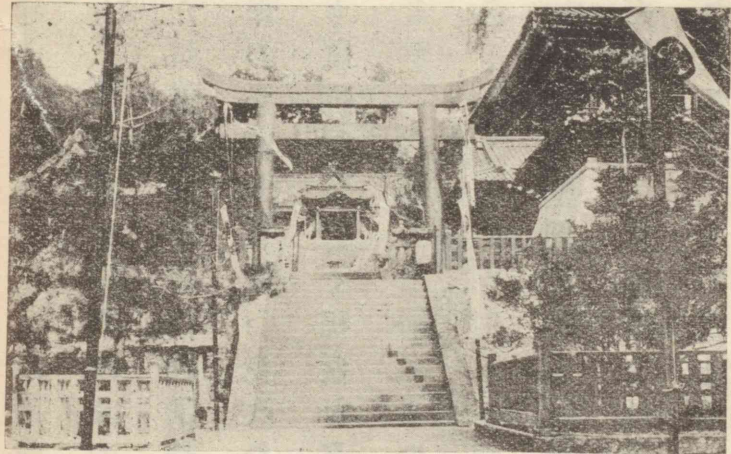
* 臨濟宗天武天皇時代の創建と傳ふる

せう。鈴蘭と云へば、函館の田中さんから今時分になるとよくあの花を淺草の家の方へ送られたことを想起しました。五月の一日には當地の町々で鈴蘭の小さな花束にしたのを賣ります。それを「幸福」のサンボルとして胸のあたりに挿して行く男女を多く見掛けました。
(島崎藤村)

九 興津の里

駿河の國興津の里は、もとより海道の一漁村に過ぎざれども、旅人の往來繁き地なり。そは、海道の名區として知られたる清見寺の所在地なると、天女の天降りけん三保の松原への順路なるとに由れり。されば、一月二月の頃には、參

*一 日蓮宗元和年中の
建立と傳ふる
*二 徳川家康の初の廟
所



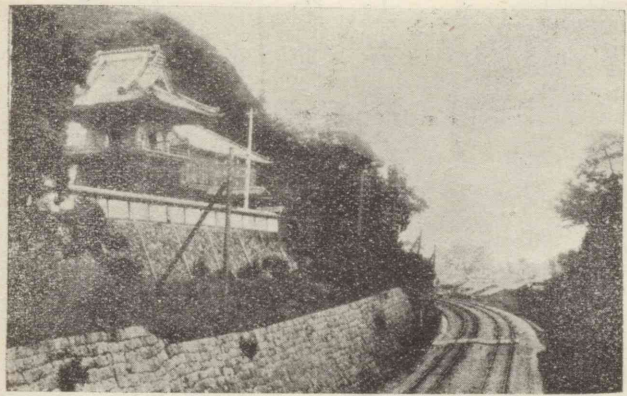
久能山東照宮

詣の道者興津驛に下るるもの絶えず。清見寺に詣で、三保に渡り、龍華寺より久能山*三に行くを一日の旅路として、静岡に泊る、大かたは變ることなし。都遠き處とて、家屋の有様、萬づ鄙びたれども趣あり。人の心も質朴なるべし、我が假住居に、處の老女の年五十ばかりなるを雇ひて、朝夕の事を頼みしが、われ都に歸る時、此の女車の窓に寄りて、今別れ參らせなば、

何れの日、何れの時にか、復逢ひ奉るべきとて、はらくと涙を流しき。あはれ、かりそめなるゆかりの我なるに、さても人の心の斯くばかり厚かりけるよ。

此處は蜜柑の名處なり。紀州の有田に次ぎては、全國此の地に及ぶものなしと云ふ。雲州又は温州と銘打てるは、大方此の地の産なりとぞ。畑は多く山の上にある。崖ともいはず、およそ一里が程の山つづきは、残る隈もなく耕され、見渡す限は、蜜柑の畑なり。秋の暮より冬の初にかけて、濃き緑の葉蔭に、此の果物の美しく黄ばめるが、枝もたわむなるさまいと珍し。此の土地の習として、山に登る人の、摘み採りて食ふを咎めず。園守の老爺に、僅かの錢など取らず

れば、思はぬ家苞の重たさに、歩み難きことも多し。名高き暖地なれば、冬來れども、山に紅葉なし。清見瀉の風光を一



清見寺

眸の中に收めて、靜かに蜜柑の木蔭に横たはれば、岸打つ波の音幽かに響きて、心も何時しか遠くなりつ。里の子らが木の實摘みながら、謠ふ歌の面白きなど、世を外なる長閑けさ言はん方なし。清見寺は由緒古き寺なり。臨濟宗の靈場にして、又の名を興國禪寺とも呼べり。海に沿ひたる

山の半腹に立ちたれば、見渡しいと廣く、清見瀉の風光は、大方此處に集れり。鐘樓高く聳えて梵音旦暮に響き、名勝の地、更に一段の幽寂を加ふ。

此處の東はづれに興津川あり。此の川を北に溯りて、甲斐の國に通ふ路は、身延山の本道なり。川口は即ち薩埵の岬にして、鐵路斷崖を穿ちて、蛇の如く走れり。此の岬よりの富士の眺また無く麗し。夕暮の空に、色面白う薄れ行く山の姿に眺め入りて、夜に入るまで立ちつくししことそも幾度ぞ。三保の浦あるは龍華寺よりの眺も、此處にはよも過ぎじとぞ思はるゝ。

(高山樗牛)

* 甲斐國南巨摩郡日蓮宗總本山のありる所

* 名は林次郎文學博士評論家明治三十五年歿

一〇 清淨の國

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質とも云ふべきは、清淨の國なることなり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざるものは、到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人間はば、

朝日ににほふ山櫻花。

(本居宣長)

この歌が國民一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日中にて最もすがく

しき時なり。空に些かの曇もなき朝、東天に朝日の輝き出づるは、實に清爽なるものなり。その清暉に、櫻花中の粹たる山櫻の、ばつと映發せるは、なほ更にすがくしきものなり。朝晴天、日の出、山櫻、これだけの好き道具が揃はば、何人か爽快を覚えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し、日本男兒の死を惜しまざるに似たりなどといふは、枝葉の事のみ。田子の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ

富士の高根に雪は降りける。

(山邊赤人)

綠波一面鏡の如き田子の浦、そのあなたに、何處より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏天を擎げて立て

るは、こもまた清淨のきはみにあらずや。この歌が名歌として、世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

月雪の中や命のすてどころ。

(榎本其角)

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月、ひとり天に泣えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃をきらめかして、亡君の仇を報いんと討入るは決死の四十七烈士。天も清し。地も清し。人も清し。當夜、吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來血性の快男子にして、清淨の美を理解せる人なり。而して、義士の中に加はれる大高子葉は、實にその俳友たり。月清きその

雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も俳句も、名句と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術・文藝、一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きも亦然り。近時、外國趣味の入り來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙の、昔も今も、日本國民の一般に愛する花は、必ずや清淨なり。又、建築に於ても然り。日光の東照宮、淺草の觀音堂を見ると、我々日本人は、唯華麗を感じるのみにして、尊さを感じる事薄し。然るに、一た

び去つて伊勢の大廟に詣でんか。千木高知れる建築、清淨の美をきはめて、そぞろに西行の歌のしのばるゝを覺えずんばあらず。若し大廟に向つて、壯大を求め、華麗を求むるものあらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたるところあるものと云はざるべからず。

滄海の中にありて、山青く、水清き我が日本は、土地そのものが既に清淨なり。開闢以來、未だ曾て外國に汚されざる我が三千年の歴史が、既に清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が、既に清淨なり。加之、我が國民は善を好み、惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よ

*文學士
國文學者
文士
大正十四年歿

く勇に、風流さへ解して、物のあはれを知れる清淨なる人間なり。我が日本が、古來東海の君子國と呼ばるゝも、宜なる哉。
(天町桂月)

一一 乃木夫人

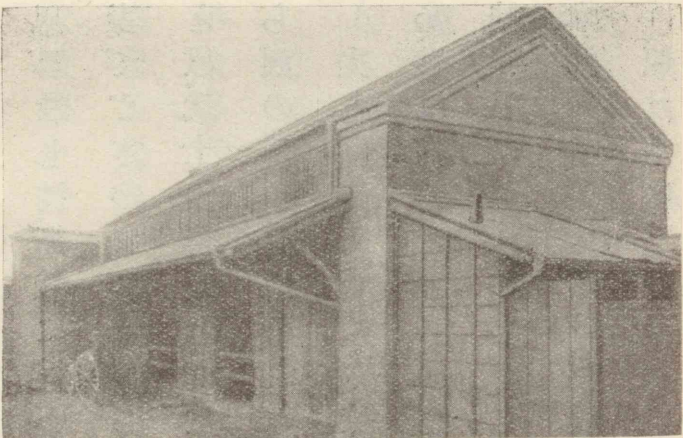
夫は伯爵大將なり。其の妻たるもの、若し一片虚飾を追ふの心あらんか、美衣、美食、思ふが儘ならんのみ。然るに乃木夫人が之をなさざりしは、實に其の性格、修養の由つて然らしむる所ならずんばあらず。大將が、武人は馬車に乗るものにあらずとして、常に乘馬にて外出せるが如く、伯爵夫人たる靜子は、僅かに一二人の下女を相手として、自ら臺所

仕事に従ふの餘暇、會餘儀なき事情ありて外出する際には、綿服か精々紬ぐらゐの粗服を着けて、電車の吊革にぶら下り行くこと珍しからざ



乃木夫人 日露戦争終結を告げて、旅順奉天に偉功を樹てたる乃木將軍の、近々凱旋すべしと傳へらる

る頃なりき、一日ある人、將軍の留守宅にては、如何に夫人が諸般の準備を整へて、待受くるかを知らんとて、新坂邸を訪問したりき。邸内塵一つ留めず掃き清められたる中を、導



乃木邸の廐

かる、儘に裏手に廻れば、そこに五十路近き品好き老女が、箒を手にして、今や廐の掃除最中なるを見たり。彼の女は引詰めたる頭髮をくるくると巻き、縞目も覺束なき木綿着の裾をきりりと端折り、塵取を持てる下女を相手に、餘念もなく立働き居るなりき。訪問客は書生の紹介によりて、此の老女こそ伯爵夫人その人なるを知り、暫時は挨拶の辭に苦しみぬ。やがて來意を告げしに、私ど

もては別に是ぞと待受は致しません。只主人は日頃馬を大事にしますから、せめて厩などは掃き清めて置きたいと思ひまして、斯様に汚い所をお目に掛けまして、誠にお氣の毒でございます」と語られぬ。凱旋將軍の待受到に厩の掃除とは、武士の妻ならでは思ひも寄らぬ所、聞くだにおのづから涙の湧く心地せらる。

夫人は飽くまでも儉素の家風を守りて、一向に華美を戒め、髪は何時も引詰の束髪に結び、儀式の時にあらざれば、髪結の手にかけし事なく、將軍夫人と呼ばるる人が、常に手織木綿の衣服を着け、夜の物も亦袖なき木綿蒲團の硬きをかかけ、飯は常に三分の米に七分の稗を交へしものなりき。

*
東京市芝區

夫人の儉素に關する佳話世に少からず。日露戰爭中、雨にも風にもめげず、虎の門なる金刀比羅宮に日參して、祈念を籠むる一婦人あり。神職はそれを唯田舎の婦人ならんと思ひゐたりしに、後に至り、あれこそ名に高き乃木夫人よ。と人より聞きて、始めて驚ける程なりきといふ。

又或年、關西地方の大演習に参加したる乃木將軍は、歸途伊勢參宮を思ひ立ち、名古屋停車場なる某旅館に泊る前、東京なる夫人に書面を出し、伊勢大神宮に參拜する考なれば、大禮服を持來れ。お前も紋服にて共に參拜せよ。と言送りぬ。此の書信を得たる夫人は早速支度を整へ、自分は木綿の紋服を着て、其の旅館に泊らんとせしに、店の者は質素極ま

れる夫人を見て、何處かの田舎老婆の紛れ込めるならんと思ひ、薄暗き片隅の一室に通し、さて宿帳を附けんとせしに、夫人は、今日は夫も來りて共に宿る筈なれば、宿帳は其の時の事とし、ともかく風呂に入りたし」と頼みたれど、目先の利かぬ番頭は飽くまで輕蔑して、風呂に案内せざるのみか、澁茶をすら薦めざりき。やがて、乃木大將來着し、家内が來て居る筈ぢやが」と言はれたるに、始めて曩の田舎老婆がそれなりと氣付き、主人の恐縮一方ならず、急に座敷を取換へ、茶菓子を出すなど、大狼狽を演じたりと云ふ。

將軍の姪にあたる娘の婚禮の際、夫人は媒酌人某大佐夫人と、支度の相談に及びて斯く云へり、若い者に餘り質素な

*
名は金太郎
都新聞社員
小説家

支度では、ほんとに可愛さうだと存じますが、決して縮緬物を着せないのは、乃木家の家憲でございますから、私も斯うして木綿物や紬ばかりを着て居ります。今度は姪の一生一度の儀式ですから、やつと紋羽二重を着せることにしました。勤儉は實に乃木家の家憲なりしなり。(遅塚麗水)

一二 詩人の妻

梁川星巖は徳川末期に於ける有名な詩人で、文は山陽を宗とし、詩は星巖を斗とすと並び稱せられた人であり、且なかなかの慷慨家でありました。その妻は紅蘭といつて、亦一種の女丈夫でありました。

紅蘭は美作國の豪家長谷川氏の女で、幼少の時から、男勝りといはれて居たのであります。何事をするにも勝氣で、はきくして、小さな事に齷齪致しません。十歳の時には、最早ちよつとした詩ぐらゐは作れたと申します。當時には珍しい學問のある女子で、そして婦工も一通りは心得て居ましたので、星巖はこれこそ望むところの良妻であるとして、自ら先方へ結婚を申し込みました。紅蘭の家でも、星巖といへば名高い學者であるから、快くこれに應じて、黃道吉日を選んで、めでたく輿入を致させました。ところが、いざ結婚式を挙げようといふ時になつて、星巖は思ひ出したやうに縁女に對ひ、今からちよつと旅行して、三月許りの内に

唐代の詩を七言絶句・七言律詩・五言律詩の三體に分けて編輯せる書、編者は宋の周伯弼

歸つて來るから、それまでに三體詩を諳記して置け。と言つて、人々の止めるのも聽かず、飄然として出て行きました。詩人や歌人には奇行が多いとは聞及んで居たものの、これは又餘りに突飛な行だと、人々は大いに驚きました。しかし肝心の縁女は何とも思はぬ様子で、その日からして留守を致し、裁縫や家事の暇ごとに、夫から申しつかつた三體詩を出して來ては、熱心に諳記して居りました。もとより記憶力も強く、漢學の素養もあるところから、さほど困難も感じませんで、間もなくそれを諳記してしまつて、今は安心だと、夫の歸る日を待つて居りました。ところが、星巖は約束の三月を経ても歸つて参りません。

どこに何をして居るとも申して参りませんので、縁女はとにかく、一家親類の者は、どうした事であらうと案じ暮らしました。が、その内には歸るだらうと心頼みして、待ちに待ち暮らす間に、早く一年も過ぎ、二年も過ぎたのであります。何ほど待つても、風の便だにありません。いかに暢氣のんきな人にしたところで、結婚前の妻を置いて、二年も三年も旅に出て居る者はあるまい、これは必ず途中でどうかたつたのであらう。若しさもなく、歸るのを忘れて居るやうな男ならば、連添ふ妻には誠に頼もしげない人である。どの道見込がないから、綺麗に暇を取つて歸るがよい。まだ結婚前で幸であつた。嫁期の過ぎぬ間に、他に良縁を求めねばな

らぬと、父母までも切りに家に歸ることを勧めるやうになつたのであります。

けれども、當人はこの忠告には反對で、斷然これを斥けました。その心の中には、果して夫星巖は途中で死んだのであらうか。死んだとすれば、自分は最早未亡人として一生を送るべきものである。若し幸にして生きて居るのなら、一旦縁あつてこの家に嫁いだ以上は、いかやうな事があつても、自ら出で去るのは女の道でない。いづれにしても、自分一人が覺悟して居さへすれば濟む事であると、かやうに考へて、堅い決心をして居たのであります。しかし何と申しましても、まだうら若い女の事でありまますから、ただ一

人ほの暗い燈火に對つた時には、さすがに夫の上を案じ、身の行末を思ひわびて、心に泣いた事もありました。

かくて又一年を経ました。花は咲いて、花は散つて、又も青葉の頃となりました。濕りがちな梅雨の空に不如歸と啼くほととぎすの聲は聞えても、夫の便は更にありません。父母は我が娘の衰へ行く姿を見て、非常に氣を揉みました。されども當人の心は鐵石の如く、頑として少しも動きません。ちやうど四年目の秋の頃であります。今は憂さにも淋しさにも馴れて、ほど過ぎては待つともなく、待たぬともない夕暮に、ゆくりなくも星巖は飄然と歸つて參りました。詩人・墨客の常として、一度旅に親しみますると、彼處の花、此

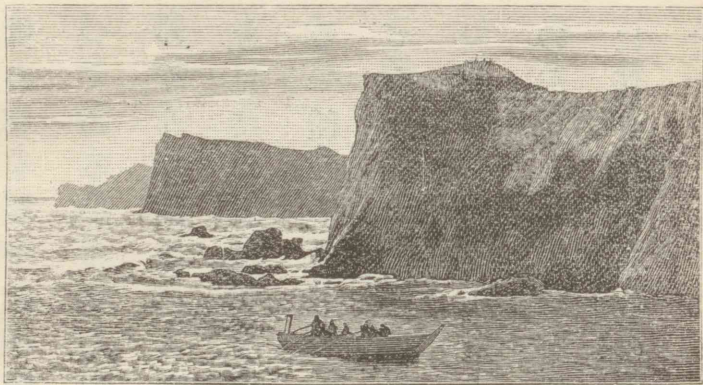
處の月と、それからそれへと憧れて、つい歲月の流れるにも心づかず、三歳の月日を旅の空に過したのであります。それでも出る時に申しつけた事は忘れなかつたものと見えて、家に歸るとすぐに、まづ、三體詩は語記したか。と問ひました。妻は夫の間に應じて、すら〜と答へましたので、星巖も大いに喜び、ここに始めて、結婚の式を擧げたのであります。この一條の話は、或は星巖ほどの人物でありますから、非常に堅忍不拔の志操を持つて居る妻ならではの持つまいと思つて、殊更に試したのであらうといふ人もあります。或はさうかも知れませんが、試験にしては、餘りに長い試験ではありませんか。又或説には、星巖は結婚を濟ませて直

*實踐高等女學校校長

ちに行つたので、妻だけには得心させて出立したのだとも申します。
*下田歌子

一三 九十九里濱 (一)

潤さ一町餘、長さ十六里半の此の大きな砂濱は、人の子の生活の戦場で、同時に其の遊び場であります。風雨の中の舟の引揚げ、一時を争ふ漁舟の乗出し、地曳の網のあがりきは、男は赤裸、女は眞顔でえいゝ聲を出す時は、自然を相手の戦争といふ感がひしゝと人を壓します。併し風雨が過ぎて二三日、右に大東、左に飯岡の岬も歴々と見えて、空青と、日麗らかに、心地好い程の南風がそよ吹いて、萬里一碧



九 十 九 里 濱

の海の笑顔に愛嬌ばかりの白波を立てる日は、向うの方でながらみ貝を搔く男も、赤裸で子供の風呂桶程ある飯櫃引寄せて、立ちながら茶漬を食つてゐる赤銅作の仁王様も一張羅の晴着を汗にしまいとして、それを風呂敷に包んで負つて、紅い襦袢一つになつて波打際に行く田舎娘も、街道の砂ほこりに引換へてしつとりと弾力ある波打際の砂路を荷馬車挽かせて行く向鉢卷の男も、自轉車の小僧も、砂の上

に坐つて日がな一日のんきに網を繕つてゐる爺さんも、子供のおもちやに小蟹をとらうとして懸命に両手で穴を掘つてゐるかみさんも、人形のやうな兩手を舉げて家鴨の蹠のやうな兩足でよちよち走つて來る三歳の女兒も、それらを見てゐる私共も、鬼がゐない賽の河原の砂遊びをしてゐる一種の子供としか思はれません。まことに人生は嚴肅であります。そして又快活であります。

帆布
Canvas*

此の砂濱はまた大きな帆布*であります。色々のものが色々のものを描きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに任せてゐる此の帆布の上に、勿論不朽とか無窮とかは許されません。しかし刹那のものにも人間の不朽より

愛すべきものはあります。

第一に愛すべき波の手の跡を御覽なさい。波は生きてゐます。活きた波の手の跡に、波の氣分の顯れてゐないのはただの一筆だつてありません。波は好んで砂をしじらに織ります、松皮模様を描きます、鱈皮を作ります。朽木型、鮑をかけた玉目形。頗る意氣な綾や縞も波の手つくりです。人の足跡、子供の足跡、轍の跡、馬の足跡。大きな梅花模様は犬が行くく、描いたのです。不具な楓の三本趾、鳥にしては大跨なのは鳥に違ひない。ひよひひよひひよいとやゝ暫く續いて消えてゐるのは、何かに驚いてばつと飛立つたのであります。小さな模様の小刻みに右に續いて

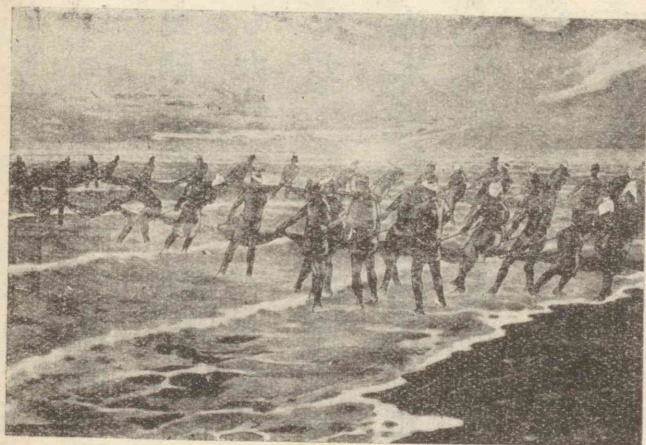
左に折れ、また翻つてもとへ戻つて居るのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡があります。貝の歩いた跡があります。ある時、小さな小さな刷毛でばつばと刷いたやうな織い織い半月形を、これは何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見て居ると、龍の鬚に似た小さな草がそ知らぬ顔して、私ぢやありません。と織い首を掉つてゐました。

一四 九十九里濱(二)

九十九里に往つた最初は七月といつてもしけがちで、此の大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や、粕谷から持參の

甘藍・豌豆、伊香保の干蕨の類ばかり食つてゐる日が續きました。その内二週間も経つと、七月も半ばになりて、鱒の曳網が始まりました。私共の歸る頃は鱒も大きくなり、味も大分よくなつてゐました。朝暗い中から拍子木が鳴ります。それは地曳の始まる知らせです。私が浴衣一枚で海水浴に行く頃は、大抵もう曳き始めてゐました。よく風いだ朝などは、地曳の組が、幾組も幾組も南に北に並んでゐます。霧の中に小さく見ゆる組、もう眼に入らぬ遙なく、所にゐる組もあります。なる程九十九里は大きな濱です。腰と踵に力を入れて、急がず休まず永劫につづくかのやうにじわ／＼曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の

目標の浮樽が見えて来てからの活氣はまた見物であります。小一町も離れて曳いてゐた南北二列の曳子が追々近



細引地の濱里九十九

寄つて来たかと思ふと、一方の列が網を抱へながらえつさえつさと他の一列の方へ駈寄ります。鉢巻の赤裸男がざんぶと海に飛込んで、網元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾つも幾つも並べられます。波打際では、其方曳け、此方絞れと、網主が罵りわめ

いてゐます。私共も砂の上からそろそろ波打際へ向ひます。もう網は盡きて繩網が見えて來ました。其の或ものは向鉢巻、腰膚脱いだいゝ加減な婆さんかみさん娘までがざぶざぶ海に飛込んでいつて、件の繩網を攫んで、一抑一揚歌で拍子を取りながら引張ります。名物の地曳歌はこれです。中でも年配の女が金切聲で音頭を取ります。皆がつづいて囃します。彼一句、此一句、歌つては曳き曳いては歌ふ。抑へて、揚げて、かがんで、伸びて、右の片足をひよいと上げて、拍子も調子も面白く、網は段々上つて來る。一樣な節の間々に「何とか何とかやあい」と一齊に囃す時の面白さ。もう網が見えて來ました。網の繼目を全速力で解く。海

に潜りて網の囊をしぼる。眞裸の網主が咽喉も裂けよと
わめく。一切の男女はぐるりと網に取りつき、何とか何す
る、何とか何せい、何とかやあい」とやはり歌ひ続けながら、網
を手繰つては、刃ね、段々囊の底へ魚を寄せて行きます。子
供がたまを持つてたかります。もう網の中は、さつきから
鱈や鯖の青光り、白光りが、ばたく、ばたく、ごつたかへし
てゐます。鱈の千五六百は、はいるやつさ籠が持つて來ら
れて、一杯になると、向鉢巻、雙肌脱ぎの女たちが二人で籠の
縁を攫んで、やつさくで濱に持つて行きます。どりと置
くこともあり、ひつくりかへすこともあり。いやもう
盛んなことです。

地曳通ひは私共の日課でした。私はかく自ら嘲りまし
た。

地曳すればわれも鷗と飛んで來つ、

魚獲んとして去りがてにする。

拍子木が鳴ると、いそく飛んで濱に行き、獲物を手に入
れるまではうるついて立ち去らぬ私は、魚欲しさに地曳網
の中を往つたり來たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶり
たちに似寄つたものでした。

*號は
文士 蘆花

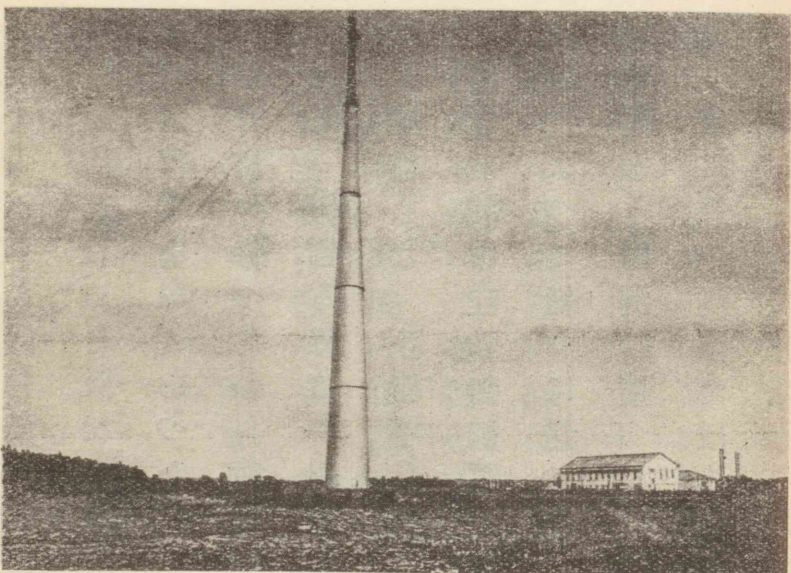
*徳富健次郎

一五 無線電信の偉効

大正十二年九月一日突如として起つた關東の激震は、空

前絶後の出来事であつた。我が帝都は殆ど壊滅・灰燼に歸し、横濱・横須賀も全滅した。然も人命の失はるるもの數十萬、鐵道は破壊し、通信機關悉く杜絶し、數百萬の人命は危急に瀕した。此の時急を全國に訴へたものは獨り横濱港にあつた汽船コレア丸の無線電信であつた。逸早く關西の都市・港灣にある無線電信局を呼出して其の救助を乞うた。關東數百萬の人命繋つて一無線電信局にあつたと言ふも過言であるまい。吳佐世保にある軍艦は此の無線電信によつて食糧・救急用品を満載して救援に向つた。

大阪・兵庫よりは軍艦・商船に米穀を満載して送つた。當時東京灣口に數十艘の軍艦及び救援汽船の密集するを見



原の町無線電信局

て、大いに意を強うしたのは獨り著者のみではあるまい。

此のコレア丸の叫んだ悲鳴は、逸早く原の町無線電信局の知る處となり、直にこれを世界に向つて放送した。〇〇—〇〇—
 〇〇— 總べての無線電信局よ、總べての無線電信局よ——J.A.A. J.A.A. J

△△——こちらは日本の原の町局です……と力の限り呼び出した。これに感應したのは數千哩彼方の米領布哇の無線電信局であつた。

第一信が終つてから數時間の後、再び放送を開始した。そして一報到る毎に一報を送り、終に連續數晝夜、根限り精限り發信した。不眠不休これに當つた。

果せる哉、布哇の無線電信局では直ちに之を桑港に送り、陸線によつて紐育に送つた。報道の大西洋を越えて、英國、佛國、獨逸と歐洲に擴つたのは、事後僅々數時間の後であつた。實に驚くべきではないか。世界の新聞は皆三日の中に一齊に日本に於けるこの大慘事を報道した。

米國では其の日出帆の汽船の出發を停止して、食糧、救急品を積送した。多量の物資はどしどし送られた。數百萬弗の義捐金は日ならずして集つた。政府は東洋の米艦隊に命じて我が國に向はしめた。

英國も續いて救援の方法を採つた、列國何れも同様の手段に出た。米國の新聞は日本無線電信界の英雄として原の町局長の肖像を掲げてこれを激賞した。實に無線電信の偉効として永く銘記すべきことである。

(伊藤賢治)

一六 三人の時計

甲、乙、丙の三人が或所へ行かうと思つて、その時間を相談しました。

「一時半の汽車にしよう」と甲が言ひました。
「よろしい。しかし今は何時だらう」と乙が言ひました。

「二時十分前だ」と自分の時計を出して見て丙が言ひました。
「君の時計は合つてゐるのか」と乙が聞きました。

「あゝ、僕の時計は正しい。ドンに合はせたのだから」と丙が答へました。

「いつ合はせたのだ」と甲が聞きました。

「三日前だ」と丙が答へました。

「それでも君の時計が後れる實なら、君の時計はもう正しくはないだらう」と乙が言ひました。

「そんなことはない。僕は僕の時計を信ずる。」

丙は又きつぱりかう答へたあとで、甲に聞きました。

「君の時計は何時だ。」

「二時十分過ぎだ。」

「随分進んでゐるね」と丙が笑ひました。

「あゝ、僕の時計はあてにならない」と甲が言ひました。

「それでも、君は君の時計をいつドンに合はせたのだ」と乙が甲に聞きました。

「昨日だ」と甲が答へました。

「昨日。それなら、三日前にドンに合はせた丙の時計よりはあてになるかも知れないぢやないか。」

「うん。しかし僕には僕の時計は信ぜられない。なんだか違つてゐさうな氣がする」と甲が俯いて答へました。

「そんなあてにならない時計を持つてゐても仕方がないぢやな

いか」と丙が罵つて言ひました。

「僕の時計に合はせ給へ。」

「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう。」

甲はかう言つて自分の時計を丙の時計に合はせました。

「君の時計は何時だ。」

丙は又乙に聞きました。

「かつきり一時だ。」

「いつドンに合せたのだ。」

「一昨日だ」と乙が答へました。

「やはり前む質だね。」

「いゝや、僕の時計はどちらかといふと少し後れる質なのだ。だから多分今は一時五分過ぎ位だらう。」と乙が言ひました。

「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ」と丙が笑つて言ひました。

「うん、少しは違つてゐるかも知れない。しかし大した違ひはない筈だ。此處から停車場までは、どの位かゝるだらう。」

「二十分あれば十分だ。だからまだゆつくりしていゝ」と丙が言ひました。

「しかし、今が一時五分過ぎとすれば、あと二十五分しかないのだから、僕は一足先に出かけるよ。停車場で、いづれ會はう。」と乙はかう言つて出て行きました。

「氣の早い奴だ。」

丙と甲とはかう言つて笑ひました。

しかし、それから暫くたつて、甲と丙とが停車場に着いた時、乙は

二人に言ひました。

「汽車はもう出てしまつた。僕は間に合つたのだが、君達を待つてゐたのだ。」

甲と丙とは驚いて顔を見合はせました。

「それでは僕の時計は違つてゐたのかな」と丙が顔を赤くして言ひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ。僕の時計は十分後れてゐた。甲の時計があつてゐたのだ。」

「さうかなあ」と甲がぼんやりして言ひました。

「して見ると、君が一番利口だつたわけだね。」

「さうだ。自分を知つてゐる者が一番利口だ。時計は信ずる爲に在るものだ。信ぜなければ、それは何の役にも立ちはしない。」

文士*

間違つた時計を持つてゐて、それを信ずるのは固より悪いが、又どんな正しい時計を持つてゐても、それを信ぜなければ、間違つた時計を持つてゐるのと同じことだ。又なにも持たないのと同じことだ。間違つた時計を信ずる者も、正しい時計を信ぜない者も共に汽車に乗ることが出来ない。それは兩方共馬鹿であるから、自分を知つて、信ずべきものを信ずる者だけが、汽車に乗ることが出来るのだ。

乙はかう言ひました。

(長興善郎)

一七 千里の藪

印度は由來自然の國である。植物は繁茂し、生族は群生して、自然の恩惠の最も豊かな國である。此の國に天地開

關以來未だ曾て斧鉞の入らぬ千里の藪があるといつても、誰かこれを異ましまう。藪とはいへど、それは大森林である、大叢林である。丈はさほど高くない灌木が、幾十里に亘つて、犇々と枝を差し交し、晝尙暗き木蔭には一線の日光をも漏らさぬ。土はじめくとして、自然に腐朽した巨木が算を亂して縦横に倒れて、怪しげな青草の蔓がするくくと其の幹に絡はつてゐる。朽葉に埋もれて咲ける名も知らぬ草花には、何か自然の默示があるやうに感ぜられる。

試みに小高い丘の一端に立つて、遠く眼を放てば、眼の及ぶ限り緑滴る樹木の海である。我が國の平野に見るやうな喬木のすくくと叢林を抜くやうなことはない。叢の

海、藪の海、私は印度を旅行して屢、此の不思議な海を航海したのである。

此の不思議の海を安全に航海する唯一の船は象である。象の背に乗つて行く外渡るべき方法はない。車も馬も其の中へは入れない。巨木・亂枝は透間なく密生し、荆棘は利刃の如く身を刺し、蔓草は容赦なく足に纏ひ、足を運ぶことも出来ねば、車輪を轉ずることも出来ない。唯護謨板のやうな象の足、鎧のやうな象の皮膚に對しては、荆棘も、亂石も、蔓草も殆ど抵抗力を有たない、ぐしやぐしやに踏付けられ、蹂躪られてしまふ。そして、象は彼の長い鼻を打振り打振り、障害物の悉くを片端から方づけ方づけして通り行く。

普通象一匹には八人の客が乗る。象使ひは頭上にあつて馭する。

私が通つた千里の藪の中で一番長いのは、セイロンにあるのであつた。一日、ダンバラといふ所からポロナルワといふ所を指して私は牛車を雇つた。往復七日間の食糧を準備して、土人の牛丁二人を伴なうて、唯一人心淋しく出發した。

小さい一筋の街道が、細々と深い暗い藪の中を縫うて通じてゐた。牛は遅々として車を曳いて行く。行けども行けども果てしがない。いくら行つても同じやうな叢林・雜草・細木・蔓草の海が幾十里となく續いてゐる。名も知らぬ

木が縦横に大小の枝を擴げて、微かに其の間を漏るゝ日光が懐かしく仰がるゝのである。

永い夏の日も漸く黄昏れて、夕靄が低く四邊を罩むる頃に、牛車は道側に止つた。見れば、其處には一筋の清流が、涼しげに流れてゐる。究竟の露營地である。牛丁は水を汲んで湯を沸かして、食事の準備をなし、牛には水を與へた。

食事を終へると、牛丁は何の故か焚火を始めた。夜は次第に更けて行く。溪川の瀬の音は洄え渡つて千古の森の香が嗅覺を刺して、車上の轉寢の夢は結びがたい。見上ぐる空には、深藍色の地に群星の光が燦として輝いてゐる。牛丁は斷えず火を焚き續けてゐる。時に、深夜の寂寞を破

つて、あちこちに怪聲が起つた。或ものは唸くが如く、或ものは劫すが如く、或ものは絹を裂くが如く、其等が森に銜し、溪川に響いて、世にも凄惨なものである。

私は始めて焚火のわけを知つた。其等の中には虎の聲もあつた、狼の聲もあつた、豹の聲もあつた、狐のもあつた、怪禽のもあつた。此等の禽獸は皆此の千古の藪を棲所として、昔のまゝに生立つて、自然のまゝに住むのであらう。恐ろしくもまた壯快な心持であつた。

やがて、東天ほのかに紅を帯びて來て、夜は白々と明け離れたので、再び牛を轅に繋いで、昨日と同じ旅程に上つた。行く／＼牛丁に聞けば、此の藪はなほこれで開かれたもの

で、ポロナルワの先の茫漠たる大叢海には野生の象群がゐて、非常に危険であるといふことであつた。

遅々たる牛の歩みとはいへど、三日に二十里の行程を續けて、私は無事ポロナルワに着いた。(伊東忠太の文に據る)

*工學博士
建築學者
東京帝國大學教授

一八 峠の茶屋

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が寂しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと揺れてゐる。下に駄菓子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて

ゐる。

「おい」とまた聲を掛ける。土間の隅に片寄せである白の上に、ふくれて居た雞が驚いて眼を覺す。ク、ク、ク、と騒ぎだす。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つて居る上に、眞黒な茶釜が懸けてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸下は焚付けてある。

返事が無いから、無斷でずつと這入つて、床几の上に腰を卸した。雞は羽搏きして、臼から飛び下りる。今度は疊の上へ上つた。障子がしめてなければ、奥まで驅抜ける氣かも知れない。雄が太い聲でコケッコと云ふと、雌が細い聲でケ、コ、といふ。まるで余を狐か犬かと考へて居

るらしい。床几の上には一升糺ほどの煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを卷いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第に収まる。

暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がすらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火が燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうも出るにはきまつて居る。併し、自分の店を明け放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つて居る。返事が無いのに、床几に腰を掛けて、何時までも待つて居るのも少し二十世紀とは受取れない。此處らが非

*能の一流派
能の曲名

*Camera
寫眞機械の暗箱

人情で面白い。其の上に出て來た婆さんの顔が氣に入つた。
 二三年前寶生たからの舞臺で高砂たかさを見た事がある。その時ははうつくしい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後向きになつて、婆さんと向ひ會ふ。その向ひ合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞むきに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に、其の表情はびしやりと心のカメラかめらへ焼き付いてしまつた。茶屋の婆さんの顔は此の寫眞に血を通した程似て居る。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向に存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天氣で、嘸御困りでござんしよ。おゝゝ、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「其處をもう少し焚付けてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも、少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」
 と立上りながら、しつゝと二聲で雞を追ひ下す。コ、
 と驅け出した夫婦の雞は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛び出す。

「まあ一つ」と、婆さんは、何時の間にか、くり抜の盆の上に茶

碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけてある。

「御菓子をと、今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒とを持つて来る。」

そして、婆さんは袖無しの上から襷を掛けて、竈の前にうづくまる。余は懷から寫生帖を出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日の様に鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「生憎、今日は先刻の雨で、何處かへ逃げました。」

折から、竈の内がぱちくと鳴つて、赤い火が颯と風を起して、一尺餘り吹き出す。

「さあ、御あたり。嘸、御寒かる。」

といふ。

軒端を見ると、青い烟が突當つて、崩れながら板庇にからんで居る。

「あゝ、好い心持だ。御蔭で生き返つた。」

「好い具合に雨も霽れました。そら、天狗岩が見え出しました。」

逡巡として曇り勝なる春の空をもどかしとばかりに吹拂ふ山嵐の思ひ切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡くして、老婆の指さす方に、すくくと、荒削の柱の如く聳えて居るのが天狗岩ださうだ。

余は先づ天狗岩を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に兩方を見比べ畫象としての余が頭の中に存在する婆さんの顔は高砂の婆と、蘆雪あしゆきのかいた山姥のみである。蘆雪の圖を見たとき、理想の婆さんは物凄いなものだと感じた。紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものだと思へた。寶生の別會能を観るに及んで、成程老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚いた。あの面は定めて名人の

*
姓は長澤
徳川時代の畫家

刻んだものだらう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、

老人もかうあらはせば、豊かに、穩かに、あたゝかに見える。

金屏にも、春風にも、あるは櫻にもあしらつて差支ないものである。余は天狗岩よりは、腰をのして手を翳して遠く向うを指さして居る袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考へた。余が寫生帖を取上げて、今暫くと思ふ途端に、婆さんの姿勢は崩れた。さういふ時、余は手持ち無沙汰に、寫生帖を火にあてて乾かしながら、
「こゝから那古井までは一里足らずだつたね」と訊いた。
「はい、二十八町と申します。旦那は湯治にお越して……」
「こみ合はなければ少し逗留しようかと思ふが。」

「この頃はまるで締切り同様でございます。」
 「妙だね、それぢや泊めてくれないかも知れぬ。」
 「いえ、お頼みになれば、何時でも泊めます。」
 會話はちよつと切れた。帖面をあけて鶏を靜かに寫生してゐると、落ち着いた耳の底へぢやらんぢやらんと馬の鈴が聽え出した。やがて長閑な馬子唄が空山一路の夢を破つた。

*夏目漱石

*名は金之助
英文學者
小説家

一九 懷古

天の河原に八百萬
 千萬神の神集ひ、

集ひいませし天地の
 始めの時を誰か知る。

それ大神の天雲の
 八重かきわけて行く如く、
 野の鳥ぞ啼く東路の
 碓氷の山にのぼりゆき、

日は照せども、影ぞなき
 吾が妻はやと戀ひ泣きて、
 熱き涙を灑ぎてし

*日本武尊東征の時
の故事

尊の夢は跡もなし。

大和の國の高市の

雷山に御幸して、

天雲のへにいほりせる

御輦のひびき今いづこ。

目をめぐらせば、さざ波や

志賀の都は荒れにしと、

むかしを思ふ歌人の

澄める怨をなにかせん。

* (持統)天皇雷岳に
いでませる時柿本
朝臣人麿がよめる
歌
大君は神にしませ
ば天雲の霄の上
にいほりせるかも
(萬葉集)

* 萬葉集に柿本人麿
が近江大津の舊都
を過ぐる時作れる
長歌がある。又千
載集にさざ浪や志
賀の都は荒れにし
を昔ながらの山櫻
かな。(讀人不知)
がある。

* 仁德天皇難波高津
の宮に於て

高殿に登りて見
れば煙立つ民の
窻はにぎはひに
けり。

と御詠みになつた
といふ傳説がある

春は霞める高臺に

のぼりて見れば、けぶり立つ

民のかまどのながめさへ、

消えてあとなき雲に入る。

冬はしぐるゝ九重の

大宮内のともしびや、

さむさは雪に凍る夜の

龍のころもはいろもなし。

* 醍醐天皇寒夜に民
の疾苦を思召して
御衣を脱し給うた
ことがある

むかしは遠き船いくさ
 人の血汐の渡るとも、
 今はむなしきわだつみの
 まんくとしてきはみなし。
 むかしはひろき關ヶ原
 つるぎに夢を争へど、
 今は寂しき草のみぞ
 ぼろくとしてはてもなき。
 われ今秋の野にいでて、

奥山高くのぼり行き、
 都のかたを眺むれば、
 あゝく熱きなみだかな。
(島崎藤村)

二〇 森の畫

暖かい縁の椅子に凭りかかる。小枝の先に散残つた枯
 れ枯れの紅葉が眼に見えぬ風にふるへ、時に蠅のやうな小
 さい蟲が、小春の日光を浴びて、垣根の日陰を斜に閃く。眩
 しくなつた眼を室内へ移して鴨居を見ると、ここには初冬
 の森の畫の額が薄ら寒く懸つて居る。
 中景の右の方は檜か何かの森で、灰色をした逞しい大木

な幹は轟轟と立並んで、次第に暗い奥の方へ續く。隙間もない茂りの緑は霜にやや寂びて、得も言はぬ色彩が梢から梢へと柔かに移り變つて居る。コバルトの空には玉子色の綿雲が流れて、遠景の廣野の極の丘陵に紫の影を落す。森のはづれから近景へかけて、石ころの多い小徑がうねつて居る處を、橙色の服を着た豆大の人が、長い棒を杖にして、前の五六頭の羊を追うて、とぼとぼ出て来る。近景には低い灌木が處處に茂つて、中には箒の様な枝に枯葉が僅かにくつ着いて居るのもある。あちらこちらに切倒された大木の下から、眞青な羊齒の鋸葉が覗いて居る。

寧ろ平凡な畫題で、作者もわからぬが、自分はこの畫を見

*Cobalt

る毎に、靜かな田舎の空氣が畫面から流れ出て、森の香が漂ひ、鶉の鳴く音が聞えるやうな氣がする。その外にもまだ何か知らず、胸に響くやうな鋭い感情の湧いて来るのを覺える。

二十年前の我が家のすぐ隣は叔父の屋敷、從兄の信さんの宅で、裏の竹藪の中の小徑を通れば我が庭と往來が出来た。垣の向うから熟柿が覗けば此方から烏瓜が笑ふ。藪の中に一本大きな赤椿があつて、鶉の渡る頃は、落散る花を笹の枝に貫いて、戰遊びの陣屋を飾つた。木の上には、はじを仕掛けて鶉を捕つた事もある。

叔父の家は富んで、奥座敷などは二十疊餘もあつたらう。

美しい毛氈が不斷に敷いてあつて、欄間に木彫の龍の眼が光つて居た。

いつか信さんの部屋へ遊びに行つた時、見馴れぬ畫の額が懸つてゐた。何だと聞いたたら、油繪だと答へた。その頃、田舎では油畫の石版刷は珍しかつたので、西洋畫と言へば學校の臨畫帖より外には見たことのない眼に、始めてこの油畫を見た時の愉快な感じは忘れられぬ。畫は田舎の風景で、緩やかな流の岸に水車小屋があつて、柳の様な木の下に、白い頭巾をかぶつた女が家鴨に餌をやつて居る。「何處で買つたか」と聞いたたら、町の新店にこんな畫や、もつと大きな美しいのが澤山に來て居る。ナポレオンの戦争の畫も

あつて、それも欲しかつた。との事である。

家へ歸つて夕飯の膳についても、畫の事が心を離れぬ。

黄昏時に、袖無を羽織つて、母と裏の藪で寒竹筍を抜きながらも、畫のことを思つて居た。薄暗いランプの光で筍の皮を剥きながらも、美しい畫を思ひ浮かべて、淋しい母の横顔を見て居たら、急に心細いやうな氣が胸に湧上つて、睫毛に涙がにじんだ。「何故泣くの」と母に聞かれてなほ悲しかつた。「そんなに欲しいなら買つて上げます。男の癖にそんなことでは」と諭されて、更にしゃくり上げた。母は蟲おさへの藥を取出して飲ませてくれたが、あの時の自分の心は今でも説明は出來ぬ。幼き時より母親の手一つに育てら

れ、餘り豊かでない生活が臚げに胸にしみ、それに晩秋の木枯さへ既に周圍に迫つて居たから、何かの刺激は直に譯のわからぬ悲しみを誘うたと見える。畫を買ふことを許されて、翌日、學校へ行つたが、歸りに買ふべき畫の事に心を奪はれ、教場で先生に何か聞かれても耳にも這入らぬ事さへあつた。放課のベルを待ちかねて學校を飛びだし、信さんに教へられた新店を尋ねたら、すぐ知れた。店へ這入ると、一面に吊した畫のニスの香に酔うてしまふ。彼も好い、此も氣に入つた。鍛冶屋の煙突から噴き出す眞赤な焰が黒い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る畫も欲しかつたが、如何にも靜かな此の森の畫

にきめた。額縁にはめて貰つて、その上を大事に新聞で包んで店を出た時は、心臓が高い音を立てて踴つて居た。歸途に舊城の後を通つた。お城の杉の梢は丁度この畫と同じ様なさびた色をして、壕の石崖の上には、葉を振ひ落した椋の大木が、枯菰の中の冷たい水に影を落して居る。壕に隣つた牧舎の柵の中には、親牛と子牛とが四五頭、愉快さうにさまようて居る。自分も何となしに嬉しくなつて、口笛をびゆうびゆうと鳴らしながら、飛ぶやうにして歸つた。森の畫が引き出す記憶は際限がない。堅一尺横一尺五寸の粗末な額縁の中には、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込まれて居る。又折に觸れては、その幻が畫面に浮かび出る。

現世の故郷は移り變つても、畫の中に映る二十年の昔はさながら美しい。外の記憶が薄れて來れば來るほど、森の畫の記憶は鮮明になつて來る。

他郷に漂浪しても、この畫だけは捨てずに持つて來た。

額縁も古ぼけ、紙も大分煤けたやうだが、森の畫は、畫の有つ情味は、何時でも新しい。

(吉村冬彦)

二一 鬼作左

關白殿、いかにもして、徳川殿と親しうならんと、色色に、謀を廻らし、やがてまた、その妹君を徳川殿の北の方に參らせられしかば、徳川殿この上は見參なくてはかなふまじとて、

*本名寺田寅彦
*理學博士
*物理學者
*東京帝國大學教授
*本多作左衛門重次
*豊臣秀吉
*家康

御上洛あるべきに極まる。「御家人等が危く思はん所も侍る故、御逗留あらんほどは、それに留めさせ給ふべし。」とて、大政所を下し給ひしかば、岡崎の城に入れ參らせ、重次これを守る。

この時、重次下知して、大政所のおはしますほとりに、薪を積むこと山の如し。こはそも、いかなる事ぞと驚き、大政所の御供なる女房達、はした女して、薪を積む下部男一人招き、酒など飲ませ、能く心を取りて、さて、何事にか、この程、日々にかく薪をば積むは、と問へば、いかなる事とも、いかで下郎は知りまうさん。但し、承る所は、關白殿の我が國の殿を失ひ給ふか、若しくは留め參らせて返し給はずば、今度都より御

直政
忠一

秀康

下りあつて、これにまします御方を盡く焼き殺しまうさん料の薪とかや申して、本多殿の下知として、日々に山林より伐りて來り候が、この本多殿と申すは、極めて氣の短き人にて、殿の御歸り遅し〜と待ちかねて、今朝火を附けう、晩に焼き立てうとせらるゝを、井伊殿や、大久保殿が、暫し〜と制し給へばこそ、今まではかくて候へ。いたはしや、美しき都上臈の、今の中にも灰土にならせ給はんことよと、下郎どもはまうすことにて候。といへるを、女房達にかくと告ぐれば、あな悲しやその本多といふ男が日々に參りて、恐ろしげなる聲音にて、家康よりこゝに附けまゐらせて候。御用の事あらば承りなんぞといふを、今思ひ合はすれば、三河守殿

の、始めて御まゐりありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、あれは家康が家にて、三奉行とかいふ中の鬼作左衛門といふ者の子ぞと仰せありしかば、おそろし、おそろし、鬼も子を生むにや。鬼の子はいかなる者にかとて、物越しに人々見たりしに、その親の鬼ならば、さこそあらめ。さればこそこれへ參る度毎に、家康歸り候はんとのこととは、まだ御沙汰もきこえ候はぬにやと一昨日もいひしぞ、今朝も、昨日もいひしぞ。待遠にや思ふらん。あはれ、家康とく返させ給へかし。と歎きくどきて、この由を大政所へまうしければ、大いに驚き給ひて、日々に御消息ありて、徳川殿をとく返させ給へ。こなたの有様のいふせさ、いつの世

にかは忘るべき。などありし事ども、細々とおほせ遣はされけるほどに、程なく御歸國ましまし、大政所歸り上らせ給ひければ、女房達涙を流し、情なくも、御母上を下し給ひしものかな。鬼作左が、かくこそいひけれ、とこそ計らうて候ひけれ。今は朝日の姫君を參らせ給へば、徳川殿の御爲にも、大政所は御母上にて候を、いかに鬼なればとて、己が主の事知らぬことや候べき。それにかく辛き目見せ參らせて侍れば、はや、徳川殿に仰せられて、いかなる罪にもあはせて、大政所の御恨をも晴らさせ給へ」と、とりどりに訴へければ、關白殿は笑はせ給ひて、「家康はよき者ども、あまた召し使ひけり。秀吉もその如き家人をば欲しきことに候ぞや」とば

かり宣ひて、御座を立たせ給ひきとなり。

(藩翰譜)

一一一 無識の得

平民にお腹の空く時があるやうに、大名にも咽喉の渴く事がある。話は古いが、むかし備前少將光政が渴いた事があつた。丁度秋も末で、窓の外にはちんちろりんが意氣な小唄を謠うてゐる頃であつた。

光政は二三日前鷹狩に出かけた折、途で食つた蜜柑の事を思ひ出した。光政は繡眼兒のやうに口を窄めて、立續けに三つばかり食つたやうに思つた。蜜柑は三つともうまかつた。一體が氣儘育ちだけに夫を思ひ出すと、もう矢も

楯も堪らなくなつて小姓を呼んだ。

「蜜柑が食べたくなつた。二つ三つ持つて參れ。」

暫くすると、大顆のうまさうなのが籠に盛つて持ち出された。光政は子供のやうに手を出して其の一つを取つた。すると丁度其の折襖の陰から侍醫の皺くちやな顔がひよつくり覗いた。



池田光政の肖像

「御前様、蜜柑をとの御意さう

に承りましたが、この頃の夜寒に如何でござりませうか。」

と侍醫は怯々びくびくもので言つて、圓いすべくした頭を下げた。

「うむ」と言つたきり、光政はちつと侍醫の顔を見詰めてゐたが、暫くすると掌中の蜜柑をそつと籠のなかへ返した。

蜜柑は生命拾ひをしたのが嬉しさうに籠から滑り落ちて、座敷に轉がり出した。

その夜光政は寢床に入ると、誰にいふともなく、獨言を言つて溜息をついた。

「あゝ、危かつた、危かつた。」

側に居た女が聞き答めて理由を訊くと、光政は宵の間にあつた蜜柑のことを話して、あの折自分が、その位の事だつたら、此方にも知つてゐるとても言はうものなら、今後は誰一人間違つた事を諫め立てしてくれるものも無くなるだら

うとしみじみ語つて、

「ほんとに危い所だつた。」

と加へて、また一つ深い溜息を吐いた。

人の上に立つて、多くの部下を統べてゐる者は、かうして他の忠言を黙つて聞くだけの心掛が無くてはならぬ。だが都合の好い事には、今時の上役は、

「蜜柑はお毒ですよ。」

と言はれて「そんな事だつたら此方にも知つて居るよ」と口を返すだけの物識でない事だ。すべて物を識らないといふ事は、何かにつけて便利が多い。

(薄田泣菫)

二三 立秋の丘より

ふりかへしふりかへししながら、どうにか輕快に近づいた。此の病氣の間に、油ぎつててらしてらしてゐた庭の向日葵も悉く焦げ盡くしてしまつた。眞上からがつくりと垂れた萼やその頸ねつこを見るのは寥しいものだ。箱根連山の近景には傳肇寺の墓地の樵と栗の木が見える。樵にはもう淺緑の土用芽が出揃つたし、葉と一緒に風に揉まれ揉まれする栗の青毬も、何時の間にか目につくやうになると、法師蟬のそこらに啼き立てる聲ばかりが涼しくなつた。階上に倦むと、私は時折病床を竹林の離家へ移した。地

面に近く坐つたり臥たりして、木の姿や竹の幹立をつくづくと下から眺めあげるのは親しいものだ。虔ましい心になつて、拜むやうに芋の日射等を見入つてゐた事もあつた。その竹林で行水などをする夕涼の頃もよかつた。竹の枝には馬追が舌を打つて、孟宗のしだれた葉裏には月の光の下で巢立したての蜂の子が小さな緑色の巢を營んでゐるし、まだそこらが蒸し暑い夕風の空などには、茅屋根の蔦の花の上をとらしみ蜻蛉の小飛行隊が右往左往に飛び澄ますと、それを追ひ翔ける燕の白い腰までが、ひらりひらりと紅く光つて、消えるとまた引き還して来る。あの忙しがりやの幾羽かを私はよく縁側から仰いで見た。

今では私もまた以前のやうに庭上の朝飯をとるやうになつた。家の前の孟宗と梅の木の下に白木の小卓を据ゑて、それに曲木の椅子を三脚ほど添へただけの簡素なものである。妻子と對つてふかし立てのハンでも撈つてゐるうちには、身輕な若者が朝の牛乳を配達して来る。椅子のうしろには茗荷の香もすれば、豆蓼の花もそよいでゐる。涼しいやうでも朝かげのうちからまだ炒りたてるじいじい蟬の聲もする。かと思ふとつくつくほうしも茅蜩かたなも啼く。茅蜩の聲はまだしらしら明けからあの金屬性の細い細い線の音を弾ちかせるのである。

夕食は緋と黄色いカンナの咲き明つてゐる戸口で、木馬

の背に蠟燭を立ててぼうつと火がほかす圏内の卓上に用意される。そのうちに晝寝から子どもも起き出して來るし、そこらの若篠の葉にはまるまると露が宿つて搖れる。枇杷の木の梢に天の川も濃くなれば、二つ星や三つ星の瞬きも生れて來る。カンナはもう茅の廂までとどいてゐるのである。

この頃の夜は月がやや缺け初めたが、宵のうちから赤い大きな火星がもう東寄りの海の上に出てゐる。その大きい光芒はついこの丘の下の電燈ほどには見える。私はよく屋根裏にのぼると、まづ火星から南天の星座へと双眼鏡の向を移して行く。まだ浪の音が凄じい。土用浪の名残

りでもあらう。ああ、さうして妻と對坐でもしてゐる夜ふけには、何か耳に留まるものである。その潮鳴りの上を幽かに幽かに渡りて來る小鳥の群もこれからは多くなることであらう。

かうした初夜から後夜にかけて啼く虫の音もいい。色の虫の聲が時間が移るにつれて違つた音色と代つてゆく。よく聽いてゐると、この秋ほど虫の音の深いことはない。地震の跡で何處も此處も何一つ手入れしないので、隣りの別荘では畠も砂道も丘の廣場もまるで鐵道草の曠野になつてしまつた。鐵道草の花も目に見えるかぎりが見え盛ると、花の煙のやうで、ほのぼのとあはれなものだ。晝

間はその絮毛が空一面に満ちて、まるで火山灰のやうな濃密さで飛んで来る。目も開けられぬ位である。

今朝は思ひきり早く起きたが、稍颯風めいた雨の中を妻子と庭一杯に繁つたまだ葉ばかりのコスモスの中を掻きわけゆくと、垣の根の要冬青カエデに絡んで白い朝顔の花が一つ二つ咲いてゐたのが目についた。柴折戸を抜けると鐵道草が丈よりも高く亂れてゐる。一二一二ともぐつて行くと或別荘の井戸に出る。其處で、私たちは交互にポンプの水をぶつかけた。それから裸のまま子供と駈けたり、隠れんぼしたり、高く差上げたりした。絮毛が飛ぶ。身體が痒くなる、また水を浴びる。かうして、私は今、孟宗と花卉と

*詩人歌人

虫の音と蟬の聲と、この鐵道草の絮毛とに、すつかり埋もつてしまつてゐるのだ。
(北原白秋)

二四 秋日記

二十日、午後三時、大雷雨襲ふ。夕暮霽る。墓多く庭に出づ。今夜小集を催す。その爲床に活くる花を買はせたるに、檜扇と日々草を買ひ來れり。檜扇は晝のみ咲く花なり。小集の時蕾のみ見ゆ。失敗なり。

雷雨さばかり烈しかりしに、空なほ直らず。翌日も曇り、夜雨あり。廿二日も時々雨あり。遠雷聞ゆ。廿七日、なほ暴雨あり。夜に至つて霽る。蟲聲甚だ繁し。恍として暗

き縁に端坐して聞く。こほろぎきりぎりす馬追かねたき、耳を澄ませば聞き分けらる。

もと居し下婢訪ひ來り、ふかし芋をくる。はや我が手頸ほどのもあり。

食し飽き、縁に仰臥し、星を見、蟲を聽く。我に於て天下の至樂なり。しばらく夢に入る。覺むれば十二時に近し。月、茶の間の屋根の上に出でたり。

廿九日、長男の爲に宿題を考ふ。余にも出來ず。今宵蟲聲少し。妻の部屋の瓦斯點けたる夜は、蟲聲多き心地す。試みに點けさす。多くもならず。

三十一日、朝早き空うす水色にて、朧銀の雲軽く浮かぶ。

秋なるかな。秋なるかな。

九月二日、五時にしてなほ稍暗し。東天のあの美しき雲を見よ。紅の色したるが、上らむとする日を逆さまに受けて、やうく輝き來る。屋根の瓦露にしとり、家をめぐりて皆蟲の音なり。

櫻の葉は土用の中より黄ばみて落ち初むるものなるが、あはれに見えそむるは此の頃よりなり。溝際の礫の上に散り布きて、朝日受けたる最もうれし。

圖書館に至れば、暫く見ざりし富士、例のピヤホール*の左に、藍色の肩を露はしたり。日漸く高うして、また見えず。今日風強し。木の葉頻りに落つ。館の避雷針の横に鳥二

* Beer-hall

*文學士
國文學者
第一高等學校教授

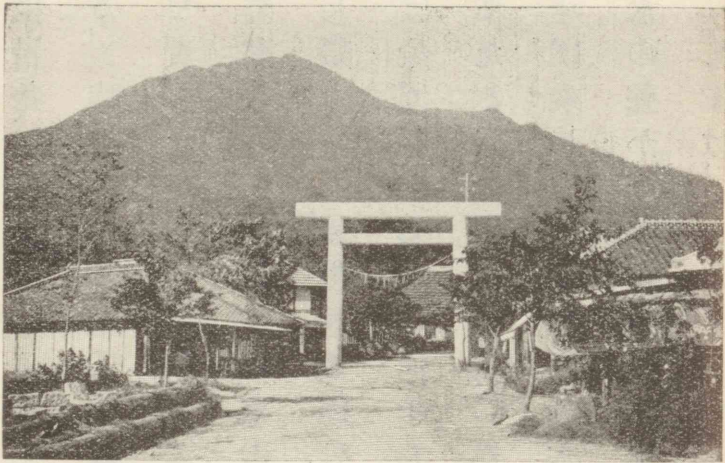
羽あり。風に向ひ、羽をそよがせ、首を垂れて鳴く。

此の頃日々館前の砂利の上に曝書をなす。紙の翻るを砂利もて鎮したり。

風愈強し。公孫樹の並木皆聲あり。雀磔の如く飛ぶ。歸りて始めて今日二百十日なるを知る。
(沼波瓊音)

二五 筑波詣で(一)

明くれば雨になりぬ。さりとして已むべきにもあらねば、濡るゝ覺悟にて朝飯を促し、箸とるゝ見渡すに、谷も山も霧こめて、雨いよゝしめやかなるに、軒近き桐の梢には、雀の飛びかふも見ゆ。行く道ならずば、却りて興ある景色な



筑波山登山大口鳥居

相映じて立てる美しさよ。

るべきに、車夫に案内させて宿を出づ。雨やみたり。石段を登りて拜殿にぬかづく。入口には御神橋とて、赤き欄干わたせる太鼓橋あり。雲に聳ゆる樓門あり、寶前の額は忝くも彰仁親王の御筆にて、神號の文字たふとく仰がれ給ふ。櫻の紅葉のいと艶やかなるが、銀杏の黄なると

左の坂を登れば、男體山道といふ石立てり。是より木の根・岩角、迂る足を踏みしめつゝ、梯子の如く急なる道を攀登る。時々零るゝ梢の露は雨よりも繁く、燃立つ顔に降りかゝるも、なかゝ憎からず。枝さしかはす松・杉は、天を蔽ひて晝も暗きに、立雜る木の葉の色、松明の光と見えて、道照らし顔なるも面白き山路なり。特に美しきは白膠木にて、楓は餘り多からず。何やらん山彦かへして呼び應ふる鳥、忘れたる様に折々鳴く。櫻塚と云ふに名木の櫻あり。見渡せば、來し方の紅葉、松の木の間を染めて花よりも美しく、谷水の聲かすかに響き出でたるは、畫師の筆にも寫し取らるべしやは。

薄からぬ色見せむとや村時雨

夜の中に神のくだし添へけむ。

此のあたり楓やうゝ目につきたり。青葉の雜りて見ゆるは、山廣くして神のたくみの未だ届かぬにやあらん。

筑波山たにのみぢば誰まちて

秋ひとしほの色のことすらむ。

登りつめたる處を五軒茶屋と云ふ。平にして北の方打開けたり。「まづ目の前に、波の如く、魚の脊の如く、横たはり伏して眺めおろさるゝは、蘆穂山、其の右なるが我國山、其の左なるが加波山なり」と車夫教ふ。其のこなたなる一群の人家は眞壁、遠く霞めるあたりや、木綿もて知られたる眞岡な

*常陸國真壁郡にある川

*名は信 水戸藩士 東湖の三男

らん。「白くうねり行くこそ櫻川よ」と聞くにも懐かしさ當ならず。雲をへだてて、への字なりに見ゆるは、陸奥境の八溝山ひづりやまにして、二十番の観音のある處なり。茶店のあるじ曰く、此處は水戸浪士の籠りし時に、切開かれたる跡にて、私どもが茶店を出し、此の景色を御客様方にもてなし申すも、浪士のお蔭なれば、其の大將たりし藤田小四郎様の御筆を額にしおきて、常に忘れずとて、指し示す方を見れば、依雲亭の文字は黒くくすぶりたる板に残りて、藁屋の軒に仰がれたり。

二六 筑波詣で(二)

こゝより更に道をかへて、左の方へ登らざるべからず。道愈嶮しく、紅葉愈美し。最早染めのこしたる梢も見えず。花か錦か。黄なるさへ樺なるさへこきまぜたる、秋のわざこそたくみなれ。

夜な〜に神や錦を急ぐらむ、

つゆとしぐれを織姫にして。

喘ぎ〜巔に上れば、風寒くして汗もいづくに行きつらん。千木高知る神の宮居は、南面してぞ立たせ給ふ。こゝより女體山を北に望めば、同じ千木造りの宮の雲透くもすきに見えて、呼ばば直ちに應へつべく、旅人もし我より先にあらば、蟻の形してや見出だされなん。廣前より下を望めば、切り立



男體山頂上筑波山神社

てたる如き岩の底には、松の緑のひま〜に、紅の梢をこき
 ちらせる様、彩色よくせる土佐繪に打向ふ趣あり。若草に
 似たる松、鄭蜀に似たる紅葉、誰か此のあたりに隨身具した
 る物見車を書き
 忘れし。今朝出
 て來し筑波町、遠
 く小さく見えて、
 いよ〜我が立
 つ巖の天に近き
 を覚えしむ。
 下りて木の間を潜り、岩踏みしだきつゝ、立身石と云ふを

見に行く。十丈もあるらんと見えて、壁の如く立てる岩の
 面を、垂れたる鎖傳ひつゝ、攀ぢのぼるなり。仰ぎ見てさへ
 肝をの〜く。岩の上より見下せば、腰をめぐる紅葉小さ
 くして、仰ぎしよりも更におそろし。
 五軒茶屋に歸りて、預け置きたる傘、外套など受取り、これ
 よりは女體山さして右の方へ入る。雲やうやく晴れて、日
 影たのもしく漏れ來れり。
 もみぢ葉を片敷き臥して筑波山
 神に一夜のやどや借らまし。
 鶴鶴石、中岳の神社など拜み過ぎて、女體山の嶺にいたる。
 後の巖に上れば眺望残る所なく、霞が浦を案内にして、近

くは土浦より、遠くは鹿島・銚子のあたりまで、霞みながらも見遣られたり。刈果てたる田づらには、おりゐる鳥さへ見ゆる心地して、豊けき秋の煙樂しげに満ちわたるこそ飽かぬさまなれ。さてもそなたの空に雲なかりせば、富士の雪とも物言ひかはさるゝと聞きしを。此の山の麓に續きて、松林に包まれ立てる一群の紅葉あり。車夫に問へば、白瀧なり。と言ふにぞ、歸りに廻らんは如何に。と言へば、二里半もあるべし。とて澁々なるを、強ひて勧めて下りに向ふ。赤き欄干の橋ありて、天の浮橋と名づけたり。渡る折しも、飛びちる雲のたはむれにや、顔に時雨を打注ぎぬ。

引きあげし矛の雫の面影に

村雨わたるあまの浮橋。

これより道又急にて、鎖の力を借る事も處々に在り。數多ある神社拜みまはりて、胎内くぐりを抜け、高天の原と云ふ岩のもとを経て、辨慶七戻と云ふに出づ。いかめしき岩の二つに割れたる上に、又一つの大岩かぶさりて屋根となりたる處を潜り行くなり。傳へ云ふ、武藏坊或時釣鐘を脊負ひて、女體山に登らんとせしに、屋根なる岩搖ぎて落ちんとせしかば、七たびまで後じさりしつゝ、遂にえくぐらずして止みにきと。ただ惜しむ、安宅の關にては、機智を出しつる辨慶が、此の山にては、上なる石をはねのくる智慧すらも出さざりしを。

行行き行けば神の高嶺は雲薄くかゝりて、帷の中なる錦見
 る心地しつづ、名残は盡きせず。千木の影、紅葉の色、晝より
 も美しく、夢よりも幽かなり。
 薄衣かけたる雲のたえまより
 見返れば雲より上になりけり、
 わが分けきつる山のみぢ葉。
 白瀧のあたりは殊に木深くして、見上ぐる梢のみぢなら
 ぬはなし。其の間より、晒せる布の色して落つる水、誰かは
 人界の物と見るべき。不動堂ありて、瀧の水を笕に受け、幾
 筋も落させたり。車夫と共に、思ふやうに瀧を評し、紅葉を

*
 文士
 明治四十二年歿

賞すれば、水亦自然の聲して、秋とも冬とも知らず顔なる歌
 を謠ふ。歸るさの道は山の麓を巡りて、直ちに筑波町に向
 ふ。観音堂の山茶花、薄紅に咲亂れて、岩の下くぐる水更に
 浮世の外なり。
 (*大和田建樹)

二七 襟飾

*
 米の滑稽作家
 (一八五五—一九一〇)
 Mark Twain
 (Samuel Clemens)

*
 マアク、トゥエンといへば、米國の名高い滑稽作家だが、こ
 の小説家が女流作家のストウ夫人と隣合せに住んでゐた
 事があつた。
 マアク、トゥエンは閑さへあれば、ストウ夫人の許へ出掛
 けて往つて、夫人と娘さんとを相手に、お饒舌に耽つたもの

だが、一向無頓着な男だけに、どうかすると、寢衣のまま、飛び出したりするので、その都度細君の不機嫌を買つたものだ。「貴郎、その身装は何ですな。襦袢が綻びてゐるぢやありませんか。」

すると、この小説家は小娘のやうに顔を紅らめながら、

「や、飛んでもないこつちや、俺は何だつてこんなに粗忽者なんだらう。」

と甚く悄氣かへつたものださうだ。

ある朝も、トゥエンは例のやうにストウ夫人を訪ねてお饒舌をした。そして上機嫌になつて口笛を吹きく歸つて來た。すると、入口に細君が衝立つてゐて、亭主の姿を見

るなり、鶯鳥やうにが鳴り立てた。

「貴郎、そんな身装をしてお隣家へ往つてらしたんですか。襟飾もつけないで、何てまあ禮儀を知らない方なんでせう。」

小説家は一寸立停つて情ない顔をしたが、その儘一言も言はないで書齋には入つて往つた。そして二三分すると、女中を呼んで小さな箱を隣のストウ夫人の許まで持たせてやつた。

夫人は不思議さうに箱を開けて見た。中には黒い襟飾に手紙が一本添へてあつた。

「これが私の襟飾です。どうぞ手にとつて御覽下さい。」

私は今朝三十分ばかりお邪魔をしたと思ひますから、三十分程御覽になつたら、直御返しを願ひます。實は襟飾といつては、これ一つなんですから。ストウ夫人は命令通り三十分程襟飾を見てゐた。その間に煮物が焦げついたかどうかは私は知らない。

*名は淳介
詩人
大阪毎日新聞社員

(薄田泣菫)

二八 農夫の生活

私には何程自分が農夫の生活に興味を持つてゐるのかがわかない。私は幾度か農家を訪ねたり、農夫に話し掛けたり、彼の働く光景を眺めたりして、多くの時を送つた。それほど私は飽きな

い心地で居る。そして、もつともつと彼等をよく知りたと思つて居る。見たところあけつばなしで、質素で、簡單で、半ば野外にさらけ出されたやうなのが、彼等の生活だ。しかし彼等に近づけば、近づくほど、隠れた、複雑な生活を營んで居ることを思ふ。同じやうな服装をなし、同じやうな農具を携へ、同じやうな耕作に従つて居る農夫等、彼等の生活は極地味な灰色だ。その灰色に幾通りあるか知れない。私は学校の暇々に、自分でも鋤を執つて、すこしばかりの野菜を作つて見て居るが、どうしても未だ彼等の心には入れない。

斯うは言ふものの、百姓の好きな私は、どうかいふ機會を作つて、彼等に近づくことを楽しみとする。

赤い茅萱の霜枯れた草土堤に腰掛け、棧俵を尻に敷き、田へ兩足

を投出しながら、ある日私は小作する人達の側に居た。その一人は学校の小使の辰さんで、一人は彼の父、一人は彼の弟だ。辰さん親子は麥畑の「サク」を掛け起して居たが、私の方へ來ては休み休み種々な話をした。雨・風・日光・鳥・蟲・雜草・土・氣候、さういふものは無くて叶はぬものでありながら、又百姓が敵として戦はねばならないものである。そんなことから、斯の邊の百姓が苦しむといふ種々な雜草の話が出た。水澤・湯えご・山牛蒡・つる草・蓬・蛇莓、あけびの蔓がくもんじ(天王草)其の他田の草取る時の邪魔ものは、私なぞの記憶しきれないほどある。辰さんは田の中から、一塊の土を取つて來て、青い毛のやうな草の根が隠れて居ることを私に示した。それは「ひやうひやう草」とか言つた。この人達は又、その中から種々な藥草を見分けることを知つて居た。「大抵の御百姓に、斯の草は

何だなんて聞いても、名を知らないものが多い位に、澤山いろいろとございます。」

話好きな辰さんの父親は、女穂・男穂のことから、淺間の裾で砂地だから稻も良いのは作れないこと、小麥畠へ來る鳥稻田を荒すといふ蟲類の話などを私にして聞かせた。「地獄蒔」と言つて、同じ麥の種を蒔くにも、農夫は地勢に應じたことを考へるといふ話もした。小諸は東西の風をうけるから、南北に向つて「ウネ」を造ると、日あたりも好し、又風の爲に穂の擦れ落ちる憂が無い、自分等は絶えずそんなことを工夫して居るとも話した。

「しかし上州の人に見せたものなら、こんなことでよく麥が取れるつて、消魂られます。」

斯う言つて、隱居は笑つた。

「斯の阿爺さんも、ちつたア御百姓の御話が出來ますから、御二人で御話しなすつて下さい。」

と辰さんは言ひ置いて、麥藁帽の古いのを冠りながら復畠へ出た。辰さんの弟も股引を膝までまくし上げ、脚を顯して、兄と一緒に土を起し始めた。二人は腰に差した鎌を取出して、時々鍬に附着した土を搔取つて、それから復腰を屈めてさく／＼とやつた。

「淺間が焼けますな。」
と皆言ひ合つた。

私は掘起される土の香を嗅ぎ、弱つた蟲の聲を聞きながら、隠居から身上話を聞かされた。斯の人は六十三歳に成つて、まだ耕作を休まずに居るといふ。十四の時から灸占の道樂を覚え、三十時代には十年も人力車を曳いて、自分が小諸の車夫の初だといふこ

とと、それから同居する夫婦の噂なぞもして、鐵道に親を轢殺されてから其の男も次第に零落したことを話した。

「百姓などは、能の無いものなすこんです……」
と隠居は自ら嘲るやうに言つた。

其の時、髪の白い、背の高い、勇健な體格を具へた老農夫が、同じ年恰好な仲間と並んで、いづれも土の喰ひ入つた大きな手に鍬を携へながら、私達の側を挨拶して通つた。肥桶をかついで、威勢よく向うの畠道を急ぐ壯年もあつた。

(島崎藤村)

二九 銀杏樹 (一)

私の室の前に出て見ると、東南の方に當つて、榎・樺などの

落葉林が見える。その丘の上、その林の端に寺があつて、その寺に一本の銀杏の大木が聳えて見える。

落葉時に於けるその丘は一種の壯觀である。あらゆる木が落葉してしまつてその姿を露出して居るのを見ると、其の樹の生命の大小を明らかに示して居るやうだ。枝を廣げて居る槻は其の古い、ふしくれだつた幹を並べて居る。すらつとした櫟の木。其の枝が各縦横に別れて居て、その細い先までが透かして見える。冬の空の澄み切つた時、夕方少し紫がかつた空の下に立つて見ると、其等の樹の生命の力が、直ちに身に迫つて來るかと思はれる事がある。林と言つても、廣い山野で育つた人の考へて居る林と同じ

に思はれては困る。この林はたしかその寺の墓地を覆つて居たのであらう。

私の感じるのは、特に林の端に聳えて居る銀杏樹である。高さは大方五丈もあらう。林の他の樹よりか一段と際だつてその姿を表はして居る。樹はもとより古い。落葉して居る時にその樹を見ると、幹はふしくれだつた皺までが見える。枝はこの樹の特徴として、丈夫さうな柔かみの無い、直線的なのが、幹に叢生して居る。それが先の方になるに従つて、少しふくらんで、上端は稍すぼんで北の方に靡いて居る。かういふ風で、銀杏樹は特殊の輪廓を持つて居る樹だ。

此の樹を見ると、何時もこの樹の「種」の歴史が思ひ浮かべられる。「世界最古の植物」と言ふ様な一種の不思議を籠めた表象を感じるのである。その幹の工合、その枝の工合、全體の輪廓、それらがすべてこの不思議を表して居る謎の様に思へるのである。

それが夕映の空に聳えて居る時には、一層この感じを深められるのである。空一體に落日の光が流れて西方が紫色にしつとりして居る時、すつくと立つて居るその樹を見ると、解きにくい、不思議が目前に据ゑつけられて居る様である。

其の上に、其の直立して居る樹の姿が如何にも悲壯な心を表はして居るのではないか。この世界に於ける生存の最も長い歴史を、此の空と日光とに對つて比べて居るやうである。時を同じくして此の世界に顯れたものは、時の上^に起つて來た大擾亂、大暴風雨に際してすべて滅び去つた後、獨り淋しく新しい時代に殘されて居る此の樹の心は如何であらう。見るもの、聞くもの、凡てが現世界のもので、この種族とは、何等の關係のない者ばかりである現世界の萬象と共に、夕陽を沿ひて靜かに暮れて行く日を送る此の樹の心は、果して如何であらう。あゝこの樹の存在は實に悲壯な不思議な運命である。

ただ現世に在らねばならぬ故に在る。これ程いたまし

い運命があらうか。神祕、自然の神祕の宮殿である。

三〇 銀杏樹 (二)

時が次第に移つて春になると、この「神祕」が眼を覺まして、活動し始める。空には優しい日光が照らして、青い空合に少し霧が懸つたやうになると、そこらの樹は一齊に若芽をふいて、そよ〜と風に吹かれる。

しかし、この丘の林の樹は、其の時一番遅くまで冬枯の姿をして居るが、やがて、椶の小枝が、何處となく赤らんで來ると思ふと、そこらが緑に霞む。一番遅れて、銀杏樹も芽をふく。直線的な枝に芽がふつくりとふくらんで來ると、その

大木は全體薄緑をして見える。其の緑は一日一日と、見て居るうちに明らかになつて、三日・四日・五日と日が經つに隨つて、さつと照らす朝の光に、ふさ〜した若葉が輝いて見える。その樹の眠が覺まされたのだ。覺めて、又この大氣を呼吸しようとして居るのだ。その時にも、しこの樹の下に立つと、みづ〜しい緑の葉は水禽の足の形をして、一房づつ下つて居る。それを見て見給へ、誰にもこの葉が、この「種」の運命を新しく物語らうとして居るのが感じられるのであらう。すると、或晩風雨が來た。

思ふさま吹いて吹いて、風は無慈悲にも若葉を散々に吹きちぎつて行つた。その恐ろしい音。驕慢な仕ぐさ。戸

の中で聞いて居ると、この世界のものが皆聲をあげて叫びながら、其の暴力に自由にされて居るやうであつた。

世界の平衡が破れて、恐ろしい力が俄に動き始めたやうであつた。

次の朝、目を覺ますと、昨夜の風雨は一夜の中に静まり返つて、空は更に美しく晴れて居る。庭に出て見ると、そこら一體に若葉がちぎれて落ちて居る。楓・柳・榎・骨木、それらの葉が、小さい莖のまゝちぎれて居る。その中に銀杏樹の葉も交つて居た。

それを見て、銀杏樹の大木にも如何程かの擾亂があつた事とその樹を眺めると、風雨の後の今朝の澄み切つた空に大きい姿が静かに聳えて居る。

緑の姿は日に輝いて、常の形がただ大きく見えるばかりである。それを見て家を出た。家を出て二三町その樹の方に行くと、町の通りに、吹きちぎられたその葉が落ち散つて居た。その一つを拾つて見ると、實に巧を盡くしたものである。葉脈の線の工合、緑の色などが、見るから自然の「眞實」が迫つて来るやうに思へる。私はつくづく一夜の間にその樹にも大事件が起つたのだと思へたのである。あゝ、この銀杏樹はやはり現世界に存在して、現世紀の風雨にも遇ふのかと思ふと、凡ての生物が受ける宿命は、それが凡て神の命であることを否む事は出来ないと思はれた。あゝ

存在は、それ自身不可思議である。

それから秋になつて見ると、この樹に實がなる。黄色な肉で包まれたその實の形が面白い。何處か、熱帯の椰子の實に似て居るやうだ。一寸見にはさうは思へぬが、よく比べて見ると、なかく似て居る。

私は其の實を見て居ると、その實に深い痛ましい運命の約束が籠められて居ることを思はざるを得ない。よく考へて見たまへ。この實が土に埋まつて濕氣と溫度とを受けて二葉の芽が出る時、種の使命を帯びて生存の形を表はして來る時、すでに其の「種」の世は過去の中に葬られ盡くして、この世とは相結ばれぬ者である。現世の圏外に置かれ

たやうな運命を荷なつて居るのではないか。

初の幾萬年は、永劫の海の中に消え去つてしまつた。そして、後の幾萬年も亦、疾走しつゝ、しかし擾亂し、叫び、歌ひ、夢みつつ、過ぎて行くのではないか。この間に立つて、銀杏樹は在らねばならぬ故に、今日も立つて居るのだ。

人類にも同様の悲しみがある。文明には何等の關係なく、ただ舊い歴史の物語を荷なつて、時から時の間を過しつゝあるではないか。又は烈しく變轉して行く思想の潮流の渦卷の中に、捲入れられ、残し去られて、古い時代の思想と感情とを抱きながら、新しい時代の日に照らされて居る敗殘の人もあるではないか。心を靜かにして思ふ時、これら

*名は盈太郎
文學者

の人々の運命はどんなであらう。その思想が復活し、その勢力が再び起つて、世界の文明の波の中に立つて叫び呼ばはる日があらうか。あゝ、ナイルの岸にピラミットを築いた國民の後にあつても、その國民の中に新しい産聲はしても、又新しい力が生れて来る日があらうか。しかも、此の世の風雨は等しく他と共に、それらの國民の頭上を狂ひ吹くのである。存在はそれ自身不思議でもあるが、又大なる悲哀でもある。

*（水野葉舟）

三二 秋の夜

高臺の一夜、

家々黒く眠り、

木立は灰色に、

大空を烏わたれり。

かゝるときピアノの音ふと聞ゆ、……

冬の地のひび割るゝを見よ、

迷ひゆく路上の風をながめよ。

さらにまた霧の流れを――

これらのもの歎けるなり。

時雨來れり、

こゝろよく、明るく白く、

かれら、齊しく空を駛り、

鮮麗と嘆美との聲を發す。

さらに

耳をかたむけよ、高臺の一夜に、

われはなほ我が愛づるものの一つを聞く。

そは歌へる憂愁のピアノ、

時雨にまじる優しき樂聲なり。

家々は黒く眠り、木立は灰色に、大空を鳥渡る秋の夜の夜
更け、高臺の家に寝ねがてにゐる多感の若人の耳に、ふと何
方ともなく靜かに澄んだピアノの音が聞えて來る……
その清麗な韻ひびきに溶かされて、若人はわれにもあらず夜霧の
うす青く流れた冬近い秋の夜の街路、そこに固く冷たくひ
び割るゝ土の感觸などに想を馳せ、心は夜の微風とともに
路上を低く迷ひ、あらゆるものの歎きに耳傾ける。――

この時、突如として夜半の時雨が簷の上を過ぎて行くの
である。若人の蒼白く沈んだ心は、忽ちにその潑刺とした

響に目ざめ、今快く明るく白く大空を駛つてゆく、駝鳥の白い羽を翳した騎士のやうなその雨の姿を懐かしく想見する。「鮮麗と嘆美の聲を發す」とは時雨自らがあげる聲でもあり、また若人が鮮麗な雨の線條を想見して思はず叫び出づる讚歎の聲でもある。

かくして、やがて雨の蹙音が次第に遠く去つてしまふと、またしても静かなピアノの音が、濡れそぼつた爽かな夜の空氣を漂つて聞えて來る。かうした長い秋の夜を幾度か繰返す時雨と憂愁のピアノとの伴奏、それに目覺めつゝ、若人はかぎり無い憂を感じたのである。――

情景と樂音とが煙のやうに亂れ交りて、その中に秋の夜

詩人

*三木露風の詩集

の懐かしい象を見せてゐる作である。言葉に一つ一つ獨立があつて、しかもそれが總體に寄木細工の如くしつくり組み合つて、渾然たる諧調をなしてゐる。情調象徴の水際立つた詩技の冴えの見える作である。露風氏のこの静かな澄んだ氣稟が次第に沈潜して行つて、後年に到り、あの思索的な觀念象徴の優れた典型とも言ふべき「幻」の田園二巻を生んだことは争はれぬ。

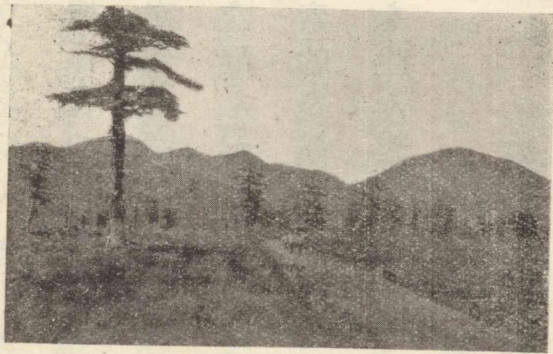
(西條八十)

三三 月の戰場が原

瀑に別れ、水聲に遠ざかりて、一步々々に緩き坂を登れば、骸骨の如き瘦せ果てたる枯木の影、幾株となく路の兩側に

林立して、次第に現れ来る月の光の淋しさ又凄さ。

「これより戦場が原」



原 々 場 戦

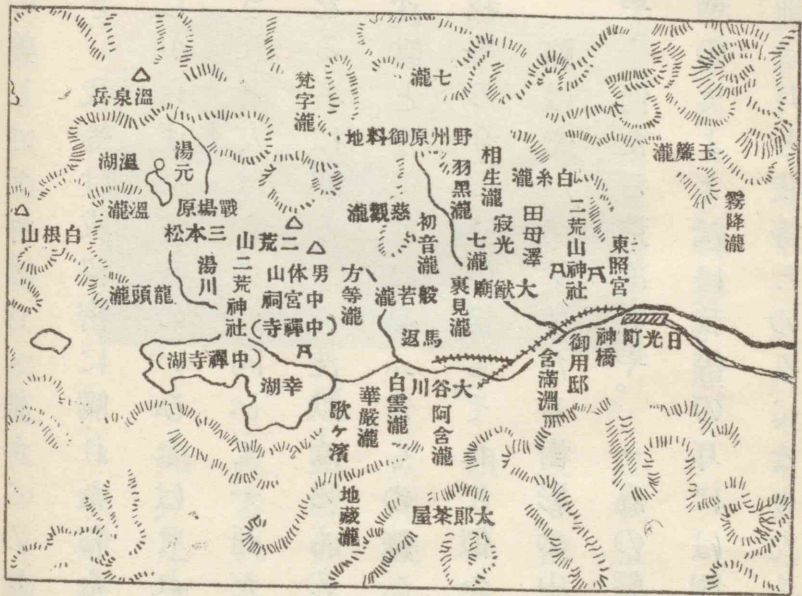
と我は低き聲して友にささやきつ。
友も眞面目なる或感に觸れたるが
如く、いつもの快活にも似ず、ただた
だ沈黙してたどり行く。やがて龍
頭瀧の水聲の遠くなりて、最早聞え
ぬあたりに來りし時、我はいつもの
如く足をとどめて振返りぬ。

中禪寺湖は一瞬の下に。

黒き四山の間に挟まれつゝ、鏡の如く月の照りたる湖水

の美しさ、又静けさ。誰かこの景を人間界のものと思ふべ
き。我等は或秘密に觸れたるものの如き心地したり。「美
しからずや」と我のいひしは、それよりなほ久しき後なりき。
されど友はこれに向ひて一語だに放たざりき。人は或大
なる者に觸るゝや、沈黙なるもの快活となり、快活なるもの
沈黙となり、或は憂ふるもの舞ひ、喜ぶもの泣くといへり。
我等の今の感は恰もそれに似たり。

路はやがて婆婆たる樹影の中に入りぬ。何たる寂寞ぞ
や。何たる荒涼ぞや。一鳥の聲なく、一蟲の音なし。否、一
葉のそよぎだに、我等の耳には聞えざるなり。恰もこの天
地は月と我等とのみになりたる如し。



日光附近の略圖

暫くして林は絶えて、右に男體山の海拔八千五十餘尺の巨人の如き姿を認む。
 春は残雪の皓々たるを賞し、夏は草花の亂れ咲きたるを愛し、秋は金風の寂寞たるを趁ひたる戰場が原は、とほころどろ落葉松・榛・山毛櫨などの寂

しき影をあしらひつゝ、渺々として限りも知らず横たはりたるが、薄白き月はその廣々と開けたる高原を照らしもあへぬが如し。四面を圍みて聳え立つ白根湯嶽の姿もいと寂しげなり。

「君よ」と友は低き聲にていふ、この寂寞はやがて幾千年前人類の未だ生まれ出ざりし時の寂寞に非ずや。即ちこの男體山の未だ噴火せず、中禪寺湖の未だ淹留せざる以前の。「まことに。」友の言葉に誘はれて、心は遠く現在の天地より離れて、幾千萬年の前と後とに漂ひ行きぬ。二人の眼に映れる月と山とは幾千年前の月と山とにして、二人の心に浮かべる戰場が原は幾千年後の戰場が原なりき。

*
(獨語) 童話
Marchen

空想にのみ馳行きたる我等は、行く／＼、戰場が原のメー
ルヘンめきたる由來を語り合ひぬ。曩にこの二荒山の神
靈と、上野國赤城山の山神と山中の湖水の所領を争ひたる
ことありたりき。二つの神は互に敵視すること久しかり
しが、この上はせん方なし、干戈の上に見えて勝負を決せば
や。とて、互に雲霧を起し風雨を驅つて、その争實に百年の長
きに及びき。しかも終に勝負を決すること能はずして、血
のみいたづらに原頭に溢れきといふ。

これ戰場が原の名の起る所以と。

草叢分けて新道へと出てし路は、やがて再び榛山毛櫛の
林の中に入りぬ。かくて月光の樹影を織出せる間を奥深

く進み行けば、一度隔りし水聲又喧しく聞え始めて、四面の
林木に反響する音、愈高くなりぬ。湯瀑の近づきたるなり。
「これより二町湯瀑あり」と記されたる標石を辛うじて月
の光に見出しつつ、細くおぼつかなき路を一散に傳ひ下れ
ば、やがて樹の間より白き調布をかけたるが如き大なる瀑
ばつと月にかがやきて見ゆ。

二人は走り出しつ。

想像せよ、深山月夜に於ける瀑布の景を。岩壁の上を瀉
下する高さ四十五丈幅十五間の大瀑は、匹練の如く樹間よ
り洩るる月光の下に瀉ぎ落ちて、亂るゝものは綿の如く、雪
の如く、烟の如く、飛べるものは霧の如く、しぶきの如く、細雨

の如く、その景殆ど人を惱殺せんとするに非ずや。月は絶え絶えに梢を洩れて、樹影は樹影とかくれんぼをなせり。我等は瀑布に踞して、ゆくりなく晃山諸瀑の批評を始めぬ。三大瀑布の中、華嚴の雄大は最も諸瀑の上に出て、これに匹敵するものは他に求むべからざること勿論なるべし。續きて霧降の綺麗これ亦優に第二の地歩を占むるを得ん。ただ裏見に至りては瀧小に、俗氣多く、決して前の二者に嗣ぐべきものに非ず。我は寧ろ龍頭湯瀑の三瀑を以て、遙にその上に出づるものとなさん。殊に湯瀑の絶大なる姿は、よく華嚴の雄壯につぎて、霧降も亦その後に瞠若たらんと思はるゝほどなるものを。次に來るは奥の七瀧慈

觀方等般若寂光一の瀧などなるべく、白糸阿含若子七瀧などは尤も品下りたるものなるべし。

すでにして板を立てたる如き急勾配を、瀑に添ひつつうねうねと攀登りて、再びかの戰場が原より來れる新道に出て、なほ四五間ばかり進まんとせし眼前に、又も不意に展げ出されたるは、寂極り冥極れる小湖水の満面に、美しき月の光を受けたる景なり。

湯の湖とはこれなり。

削るが如き前白根山の姿、薄暗き波の上に映れる樹木のさまなど、そぞろに人の心を惹きぬ。今まで喧しかりし瀑の響は、いづくにかと思ふばかりにしんとして、兎島の斗出

したる所のみ白根山の翠微を帯びて、いと暗し。
 暫く佇みてこの淋しきさまと、黒く岸頭を縁取りたる樹木のさまなどを餘念なく打見やりたりしが、やがて歩を進めて、その岸頭の暗き樹木の中に入りぬ。ここより温泉場までは、最早さして遠くもあらず。月光も至らぬばかりこんもりと生茂りたる古樹の林を、今一度明らかなる湖水の邊に出て、石多くして歩をつけ難き所を暫し過ぐれば、湖水の西北の一隅なる蘆荻の蒼々と連なりたる一帯の平地に、數箇の燈火高く低く見えわたりて、人の語り合ふ聲いくよりともなく微かに聞ゆ。

なほ少し行けば、硫黄の香烈しく鼻を撲ちて、湖水の岸頭

*名は録彌
 文學者
 小説家

のところどころ蘆荻の青く茂りたる間より、數道の湯氣の白く月光を掠めて靡けるを見る。

湯本の温泉場は一步の中にあり。

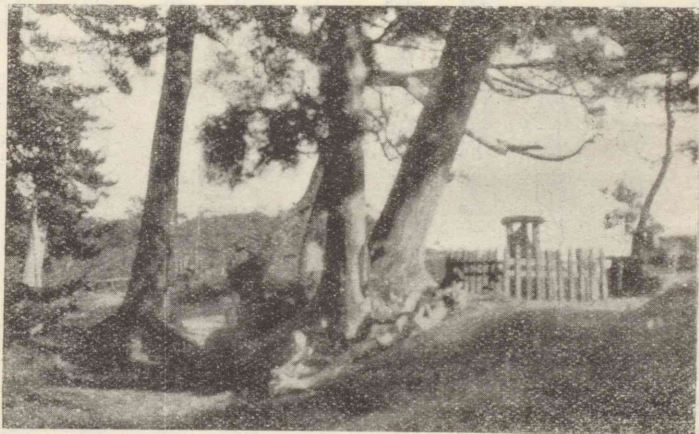
(田山花袋)

三三三 勿來關

武衡既に縛に就いて、家衡誅に伏し、其の黨四十八人亦斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國內靜平にして、民心悅服す。乃ち留守を置きて、京都に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草に馬蹄輕し。客心悠悠また戦時の秋に似ず。行きくして勿來の關に差掛る。山上模糊として白きは雲か、地上繽紛として飜るは雪か。雲と

*常陸・磐城の國境
 昔關所のあつた所



湧きて、詩情自ら動く。

勿來の關

見えしは梢の花、雪と思ひしは散來る櫻、關山春深きところ、心なき身にも感などか起らざらん。兵馬倥傯の間に在りては月を見ても樂しからず、鳥を聞きても嬉しからず。今や干戈既に戢まりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、冑も花、鎧も花、身はいつしか畫中の人となる。逸興頓に

*千載集にある

吹く風をなこそその關と思へども、

道もせに散る山ざくらかな。

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れんとするをも知らず。

*關白藤原頼道

斯くて長亭短驛に日數を重ねて京に着す。百戰功を積み、一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る、陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼の地に在りつれば、皆それぞれに見候ひなん。是のみこそ羨ましき心地すれ。と。義家長まりつゝ、答ふ、心長閑けく候はんには、床しきことも候べけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候は

ず。唯勿來の關と申す所にて、花の散るさまの餘りに興深く、あはれ、心あらん人に見せまほしく覺え候ひしかば、其の儘にうち過ぎんも口惜しく、拙き口吟に任せて、斯くなん仕りぬる。とて、彼の「吹くかぜ」の歌を打ち誦すれば、げにも秀歌をこそ致しつれ。とて、感歎特に淺からざりき。花は櫻木人は武士、斯の人斯の花を詠じて、花と人と千古に香し。

*
名は宗次郎
報知新聞記者

*
(熊田葦城)

三四 鼠

鼠の跳梁は段々猛烈になるばかりであつた。晝間でもちよろちよる茶の間に顔を出したりした。或日の夕方二

階で仕事をして居ると、不意に階下で烈しい物音や、人々の騒ぐ聲が聞えだした。往つて見ると、玄關の三疊の間に鼠を二疋追込んで、二人の下女が箒を振廻して居る處であつた。やつと其の一疋を箒で抑へ附けたのを、私が火箸で少し引きずり出して、首のあたりをぎゆうと麻絲で縛つた。縛り方が強かつたので、すぐに死んでしまつた。

もう一つの鼠が何處へ匿れたか、姿を消してしまつた。何も置いてない玄關の事だから、何處にも逃れるやうな穴はない。念の爲に長押の裏を蠟燭で照して火箸で突つ歩いて歩いたが、やはり其處にも居なかつた。唯一箇處、壁の隅の方に穴らしいものが見えたが、光がよく届かないので

はつきりしなかつた。それが穴だとしても、それを抜けて何處へ出られるかといふ事が明瞭でなかつた。若しや誰かの袂の中へでも這入つて居やしないかと思つて調べさせたが、勿論そんな處には居なかつた。何だか不可思議な心持もした。小さな動物に大きな人間が糺弄されたといふ様な氣もした。此處で若し徹底した科學的方法で明白な論理を追跡して行きさへしたら、直ちに此の何でもない謎は解けたであつたらうが、少しは馬鹿々々しくもなつて來たので、此の目前の、明かに物理の法則と矛盾したやうな事實を、假定的な「長押の裏の穴」で「説明」してしまつた。尤も科學の方面でさへこれに似たやうな例がないとは言は

れない。明るみの矛盾を暗い穴へ押込んで安心して居る事がないでもない。

此の騒ぎが静まつてやつと十分か二十分たつたと思ふ頃に、今度は臺所で第二の騒ぎが始つた。氣味の悪い叫聲が、子供等の騒ぐ聲に交つて聞えて來た。何事かと思つて見ると、年の若い女中が茶の間の眞中に立つて、大きな口をあけて奇妙な聲を出しながら、からだをいろ／＼によぢつて居る。それを四方から遠巻きに取圍んで、口々に何か言つて居るのである。

聞いて見ると、背中に鼠が這入つて居るといふのである。着物の間か、羽織の下か、どの邊かと聞いて見ても、無意味な

聲を出すだけで要領を得ない。鼠が動いたびに妙な叫聲を出してはからだをゆさぶるばかりである。そつと羽織の裾を持つて静かにかゝげて見ると、かはいらしい子鼠が四肢を伸して、丁度貼りつけてもしたやうに羽織の裏にしがみついて居る。烈しく羽織を一あふりすると、ぱたりと畳に落ちた。逃さうとするのを手早く座蒲團で伏せて、それから後は第一の鼠と同じ方法で始末をつけた。

後で聞いて見ると、玄關の騒ぎが終つた後に、女中が部屋へ歸つて坐つて居ると、妙に脊筋の處がぼか／＼暖かになつて來たさうである。變だと思つて居る内に、其處に重みのある或ものが動くのを感じたので、はじめて氣がついて、

いきなり茶の間へ飛込んで來たのださうである。

窮鳥は懐に入る事があり、窮鼠は猫を噛む事があるかも知れないが、追はれた鼠が追ふ人の羽織の裏にへばりつくといふ事は、あまりこれまで聞いた事がなかつた。併し後になつて考へて見ると、締切つた三疊の空間から鼠が一疋消え去る道理はなかつた。假定的な長押の穴はそれつきり確めても見ないが、恐らく本當の穴でなかつたらしい。

假令穴であつても、其の背面にまで通つて居ない事は、少し考へれば家の構造の上からすぐわかる譯になつて居た。

それで誰かの着物に隠れて居るといふ事は初から自明的にわかり切つた事であつたのである。それにしても、羽織

の裏にしがみついて、人間と背中合せにぶら下つた儘で、十分以上も動かないで居た鼠の心持がわからない事の一つである。

このやうな騒ぎがあつた後にも、鼠族の悪戯は止まなかつた。恐ろしい程大きな茶色をした親鼠は、恰も智慧の足りない人間を愚弄するかのやうに、自由な横暴な舉動を擅にして居た。

(吉村冬彦)

*本名寺田寅彦
理學博士
物理學者
東京帝國大學教授

女子新讀本 卷三終

大正十五年七月十五日發行
大正十五年十月十二日訂正再版發行
大正十五年七月十五日發行
大正十五年十月十二日訂正再版發行

女子新讀本

定價 卷一、二、三、四、各金四拾貳錢
卷五、六、七、八、各金參拾八錢
卷九、十、各金參拾七錢

昭和三年度臨時

定價 卷一、二、三、四、各七拾錢
卷五、六、七、八、各六拾參錢
卷九、十、各六拾貳錢



著者	久松 潜一
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤 正 叟
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋 郁

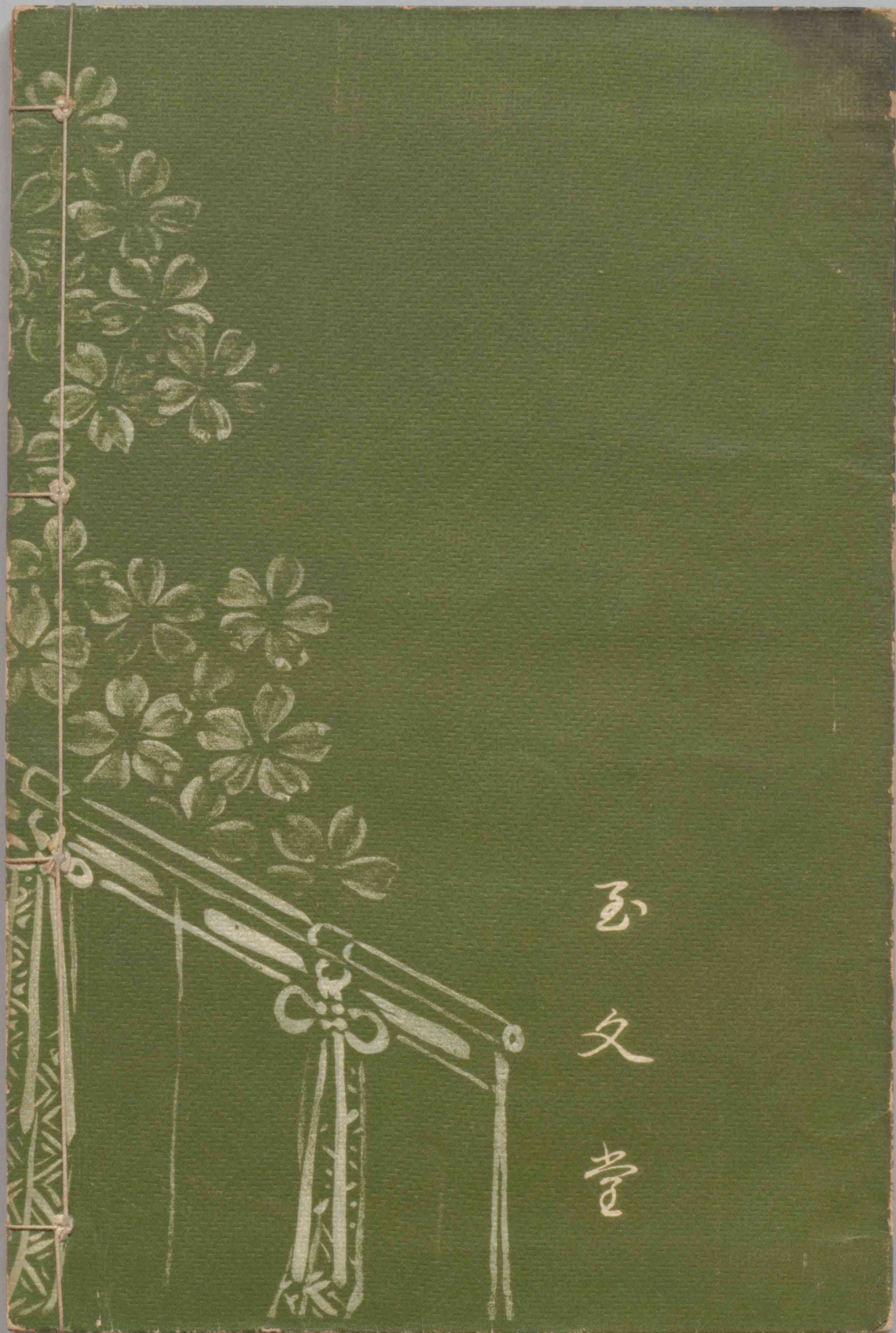
(三三印刷株式會社印刷)

發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番

至 文 堂
電話青山一三四五六番
四三四三番

弊堂發行の教科書は供給差支無き様常に澤山製本出來準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます



玉文堂